

船ヶ谷遺跡

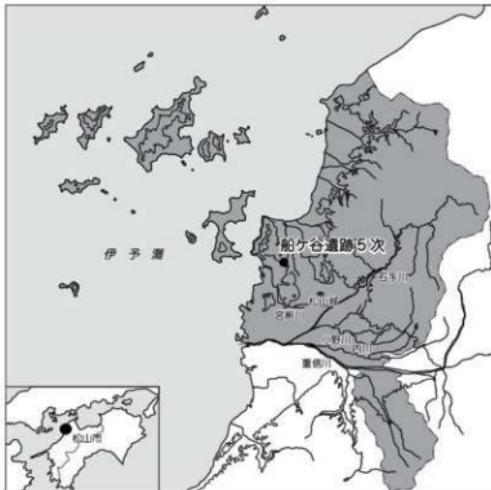
- 5 次調査 -

2018

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

ふねがたに
船ヶ谷遺跡

- 5 次調査 -



2018

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭図版 1 船ヶ谷三ツ石 4 号墳 (西より)



卷頭図版 2 船ヶ谷三ツ石 3号墳 A主体部（北より）



卷頭図版 3 壺棺 1 銅鏡出土状況（西より）

序　　言

本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団が、松山市船ヶ谷町及び東山町にかかる道路の改良及び新設工事に伴い、松山市公営企業局の委託を受け、平成 26 年度に実施した「船ヶ谷遺跡 5 次調査」の報告書です。

調査では、弥生時代の壺棺や古墳時代後期の古墳 2 基などが見つかりました。とりわけ、古墳からは主体部である石室と周溝を検出し、完形の土師器や須恵器のほかに鉄製品や装飾品が数多く出土しました。この調査により、石室の形態や副葬品の特徴などがわかり、松山平野の古墳時代における埋葬形態の一端を明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財研究の資料として、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。終わりになりましたが、関係諸機関の方々並びにご理解とご協力をいただいた松山市公営企業局をはじめ地元の方々に厚くお礼を申し上げる次第です。

平成 30 年 1 月

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長　中山 紘治郎

例　　言

1. 本書は、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが2014（平成26）年11月10日から2015（平成27）年3月13日の間、松山市公営企業局の道路新設及び改良工事に伴い実施した船ヶ谷遺跡5次調査の成果をまとめた埋蔵文化財調査報告書である。
2. 整理作業及び報告書作成作業は、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが行った。
3. 本書で使用した遺構の略号は、溝：S D、土坑・土坑墓：S K、性格不明遺構：S Xとし、番号を付記した。
4. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
5. 基準点測量は（株）真鍋設計事務所に、一部の遺構測量業務は国際航業（株）に委託した。
6. 屋外調査での写真は調査担当である相原浩二のほか、大西朋子が撮影を行った。報告書作成に関わる遺物写真は、大西と作田一耕が担当した。
7. 本書に掲載した遺構図、遺物実測図の縮尺は縮分値をスケール下に表記した。
8. 本書の執筆・編集は、相原が行った。執筆にあたっては、基本的に概要報告・年報に掲載された文章や図面を参考にし、一部については加筆や修正を行った。このほか、船ヶ谷三ツ石4号墳出土の埴輪について山内英樹氏（松山市教育委員会文化財課）より玉稿をうけ賜わった。
9. 本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。
10. 報告書抄録は、巻末に記載している。

目 次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査・刊行組織.....	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
第1節 遺跡の立地.....	2
第2節 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 調査の概要.....	5
第1節 調査の経過.....	5
第Ⅳ章 A区の調査	8
第1節 検出遺構.....	8
第2節 船ヶ谷三ツ石3号墳.....	8
第3節 その他の遺構と遺物.....	23
第Ⅴ章 B区の調査.....	26
第1節 検出遺構.....	26
第2節 船ヶ谷三ツ石4号墳.....	26
第3節 その他の遺構と遺物.....	41
第VI章 考察.....	54
第VII章 まとめ.....	56

挿図目次

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第 1 図 松山平野の地形概要図 3

第 2 図 調査地と周辺の遺跡 4

第Ⅲ章 調査の概要

第 3 図 調査地位置図 6

第 4 図 調査区位置図 7

第Ⅳ章 A 区の調査

第 5 図 A 区調査前の地形測量図 8

第 6 図 A 区遺構配置図 9

第 7 図 A 区調査区壁土層図 10

第 8 図 3 号墳墳丘土層図 11

第 9 図 3 号墳墓坑と A 主体部測量図 12

第 10 図 3 号墳 A 主体部測量図 13

第 11 図 3 号墳 A 主体部出土遺物測量図 14

第 12 図 3 号墳 A 主体部出土遺物実測図 (1) 15

第 13 図 3 号墳 A 主体部出土遺物実測図 (2) 16

第 14 図 3 号墳 A 主体部出土遺物実測図 (3) 17

第 15 図 3 号墳 A 主体部出土遺物実測図 (4) 18

第 16 図 3 号墳 A 主体部出土遺物実測図 (5) 19

第 17 図 3 号墳 B 主体部測量図 20

第 18 図 3 号墳 B 主体部出土遺物実測図 20

第 19 図 3 号墳周溝測量図 20

第 20 図 3 号墳周溝出土遺物実測図 (1) 21

第 21 図 3 号墳周溝出土遺物実測図 (2) 22

第 22 図 SK1 測量図 23

第 23 図 SK2 測量図 24

第 24 図 SX1 測量図 24

第 25 図 SX1 出土遺物実測図 25

第 26 図 黒色土出土遺物実測図 25

第Ⅴ章 B 区の調査

第 27 図 調査前の B 区測量図 26

第 28 図 B 区遺構配置図 27

第 29 図 B 区東壁土層図 28

第 30 図 4 号墳石室測量図 (1) 29

第 31 図 4 号墳石室測量図 (2) 30

第 32 図 4 号墳石室内出土遺物測量図 (土製品) 31

第33図	4号墳石室内出土遺物測量図(装飾品)	32
第34図	4号墳石室内出土遺物実測図(1)	33
第35図	4号墳石室内出土遺物実測図(2)	34
第36図	4号墳石室内出土遺物実測図(3)	35
第37図	4号墳石室内出土遺物実測図(4)	36
第38図	4号墳石室内出土遺物実測図(5)	37
第39図	4号墳埴輪測量図	37
第40図	4号墳出土埴輪実測図(1)	38
第41図	4号墳出土埴輪実測図(2)	39
第42図	4号墳北側掘部表採遺物実測図	40
第43図	壺棺1・2測量図	40
第44図	壺棺1実測図	41
第45図	壺棺1出土遺物実測図	41
第46図	壺棺2実測図	42
第47図	SK1・2測量図	43
第48図	SK3・4測量図	44
第49図	SK5測量図	44

表 目 次

表 i	調査地一覧	1
表 1	3号墳A主体部出土遺物観察表 土製品	45
表 2	3号墳A主体部出土遺物観察表 鉄製品	46
表 3	3号墳B主体部出土遺物観察表 鉄製品	47
表 4	3号墳B主体部出土遺物観察表 装身具	47
表 5	3号墳周溝出土遺物観察表 土製品	47
表 6	3号墳周溝出土遺物観察表 石製品	48
表 7	4号墳石室内出土遺物観察表 土製品	48
表 8	4号墳石室内出土遺物観察表 鉄製品	49
表 9	4号墳石室内出土遺物観察表 装身具(耳環)	50
表 10	4号墳石室内出土遺物観察表 装身具(勾玉)	50
表 11	4号墳石室内出土遺物観察表 装身具(玉類)	50
表 12	4号墳出土遺物観察表 墓輪	51
表 13	4号墳出土遺物観察表 土製品	52
表 14	壺棺1出土遺物観察表 土製品	53
表 15	壺棺1出土遺物観察表 銅製品	53
表 16	壺棺2出土遺物観察表 土製品	53

写真図版目次

卷頭図版

- 図版 1 船ヶ谷三ツ石 4 号墳 (西より)
図版 2 船ヶ谷三ツ石 3 号墳 A 主体部 (北より)
図版 3 壺棺 1 銅鏡出土状況 (西より)

写真図版

- 図版 1 1. 上空より調査地を望む (南より)
2. 調査地周辺状況 (北より)
図版 2 1. A 区 3 号墳 A 主体部遺物出土状況 (東より)
2. A 区 3 号墳 A 主体部出土遺物
図版 3 1. B 区 4 号墳遺物出土状況 (南東より)
2. B 区 4 号墳出土遺物装飾品
図版 4 1. B 区 壺棺 1・2 出土状況 (西より)
2. B 区 壺棺 2
図版 5 1. A 区 伐採作業風景 (北より)
2. A 区 伐採後の 3 号墳 (南より)
3. A 区 3 号墳の墳丘測量作業 (東より)
図版 6 1. A 区 3 号墳 A 主体部 (西より)
図版 7 1. A 区 3 号墳 A 主体部遺物出土状況 (南より)
2. A 区 3 号墳 A 主体部大刀出土状況 (南より)
3. A 区 3 号墳 A 主体部側壁遺存状況 (北より)
図版 8 1. A 区 3 号墳 B 主体部検出状況 (南より)
2. A 区 3 号墳 A 主体部と B 主体部 (南より)
3. A 区 3 号墳周溝内遺物出土状況① (北より)
図版 9 1. A 区 3 号墳周溝内遺物出土状況② (北より)
2. A 区 SK1 完掘状況 (東より)
図版 10 1. A 区 SK1 土層状況 (東より)
2. A 区 SK2 掘り下げ状況 (東より)
3. A 区 SX1 遺物出土状況 (北より)
図版 11 1. B 区 4 号墳床面検出状況 (東より)
図版 12 1. B 区 4 号墳奥壁遺存状況 (西より)
2. B 区 4 号墳玄門部遺存状況 (東より)
3. B 区 4 号墳袖部遺物出土状況 (南より)
図版 13 1. B 区 4 号墳埴輪出土状況 (東より)
2. B 区 壺棺 1 出土状況 (西より)
3. B 区 壺棺 1 内銅鏡出土状況 (北より)
図版 14 1. B 区 壺棺 2 土坑検出状況 (北より)
2. B 区 壺棺 2 出土状況 (西より)
3. B 区 壺棺 2 の蓋を外したところ (北より)
図版 15 1. B 区 SK1 検出状況 (北より)
2. B 区 SK1 白色粘土検出状況 (南より)
3. B 区 SK1 完掘状況 (北西より)
図版 16 1. 出土遺物 (A 区 3 号墳石室内 : 1 ~ 6・12)
図版 17 1. 出土遺物 (A 区 3 号墳石室内 : 7 ~ 11・
13・16・19 ~ 25・27・30・32・33)
図版 18 1. 出土遺物 (A 区 3 号墳 A 主体部 :
35 ~ 38、B 主体部 : 39・40、
3 号墳周溝 : 42 ~ 46・48)
図版 19 1. 出土遺物 (A 区 3 号墳周溝 : 47・50、
A 区 SX1 : 52・53、A 区 黒色土 : 54 ~
56、B 区 4 号墳石室内 : 57・58)
図版 20 1. 出土遺物 (B 区 4 号墳石室内 : 59
~ 64・68・69)
図版 21 1. 出土遺物 (B 区 4 号墳石室内 : 66・
67・70 ~ 73)
図版 22 1. 出土遺物 (B 区 4 号墳石室内 : 74
~ 80・83 ~ 88・90 ~ 99)
図版 23 1. 出土遺物 (B 区 4 号墳石室内 : 100
~ 135、B 区 4 号墳埴丘 : 151 ~ 155)
図版 24 1. 出土遺物 (B 区 壺棺 1 : 158 ~ 160、
B 区 壺棺 2 : 161・162)

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本調査は、松山市埋蔵文化財包蔵地の『№17 東山町古墳群』内において、松山市公営企業局がおこなった改良 26 三津配水池進入道路整備工事に伴う緊急の事前調査である。

2014（平成 26）年 7 月 1 日、松山市公営企業管理者（以下、申請者という）より松山市船ヶ谷町乙 31 番の一部外における埋蔵文化財確認申込書が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という）に提出された。申請地は、周知の遺跡として知られており、申請地の東側 150 m の丘陵部には前方後円墳である船ヶ谷向山古墳のはか、平地部では船ヶ谷遺跡として 1 次～4 次まで調査がおこなわれ、縄文時代～中世にいたる集落関連遺構や遺物がたくさん見つかっている地域となっている。

文化財課は、申請された地点について埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため試掘調査をおこなう事となった。試掘調査は、同年 8 月 4 日～8 月 13 日の間、文化財課の委託を受けて公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財團 埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターという）が実施した。調査は、掘削場所の樹木の伐採をおこなったのち、重機や手掘りで 12 ヶ所に及ぶトレンチの掘削を実施した。

調査の結果、2 ヶ所のトレンチで古墳の石室や墳丘の一部が見つかったほか、須恵器や埴輪などが出土し、遺跡の存在が確認された。この結果を受け、遺構・遺物が見つかった 2 ヶ所のトレンチ周辺について発掘調査が必要と判断された。埋蔵文化財センターと申請者は発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存のため発掘調査を実施する事となった。

発掘調査は、申請者の委託を受けて埋蔵文化財センターが主体となり平成 26 年 11 月 10 日より本格調査を行った。以下、表 i に遺跡名・所在地・調査面積・屋外調査期間・報告書刊行作業期間を記した。

表 i 調査地一覧

遺跡名	所在地	調査面積	屋外調査	報告書刊行作業
船ヶ谷遺跡 5次調査	松山市船ヶ谷町乙 31番、乙32番、東 山町222番7、222番 2、222番3、222番5、 222番6の一部	430m ²	2014(平成26)年 11月10日～ 2015(平成27)年 3月13日	2017(平成29)年 6月1日～ 2018(平成30)年 1月31日

第2節 調査・刊行組織

(1) 調査組織(平成26年4月1日時点)

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長	中山統治郎
事務局 局 長	中西 真也
次長兼総務部長	紺田 正彦
施設利用推進部 部 長	玉井 弘幸
埋蔵文化財センター 所 長	田城 武志
主 査	山之内志郎
主 査	橋本 雄一
(調査担当)	相原 浩二
(写真担当)	大西 朋子

(2) 刊行組織(平成29年4月1日時点)

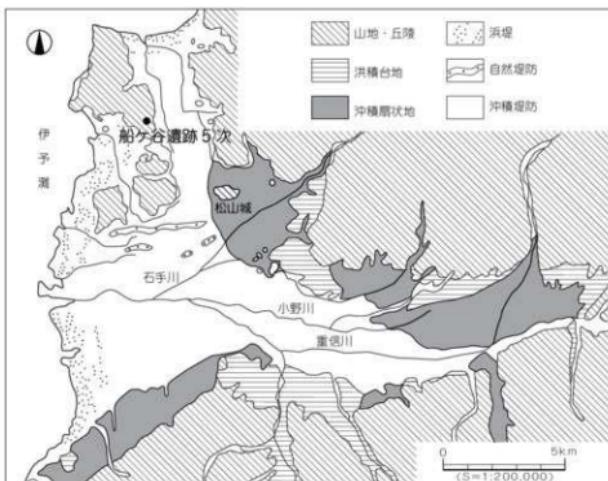
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長	中山統治郎
事務局 局 長	中西 真也
次長兼総務部長	橘 昭司
文化振興部 部 長	渡部 広明
埋蔵文化財センター 所 長	村上 卓也
(調査担当)	相原 浩二
(写真担当)	作田 一耕

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

松山平野は、東側を高縄半島の大部分を占める高縄山系の山地を背にして西は瀬戸内海に開ける。平野は、主に重信川やそのほかの大小の河川によって形成された扇状地や氾濫原、三角洲性の堆積物や海岸部の海浜堆積物で構成されている。平野北方の沖積低地は、東方の高縄山系南西面と、西方の太山寺山塊東面との間の、東西幅約2~4km、南北長約7kmにわたって広がる地溝性の低地となっていいる。本調査地は、太山寺山塊の南側の東山と呼ばれる丘陵尾根の標高38~44mに位置している。



第1図 松山平野の地形概要図

第2節 歴史的環境

周辺の遺跡には、低地に立地する大瀬遺跡、船ヶ谷遺跡1次～4次調査や太山寺山塊の丘陵部に立地する鶴が峠遺跡、船ヶ谷向山古墳、船ヶ谷三ツ石古墳などがある。ここでは、それらの遺跡について時代毎に概観していくこととする。

縄文時代

大瀬遺跡、船ヶ谷遺跡1次調査がおこなわれている。大瀬遺跡では、後期から晩期にかけての大量の遺物が出土している。中でも晩期後半の遺物包含層から石臼丁、石鎌、耕作痕土器が見つかり、初期の稲作遺跡として考えられている。このほか、ナスピ状の模様をつけられた彩文土器なども出土しており、大陸からの新しい文化の伝播を示すものとして貴重である。船ヶ谷遺跡1次調査では、大瀬遺跡に先行する河川跡や杭列、堅穴建物とともに土器、石器、木製品が多数出土している。

弥生時代

鶴が峠遺跡では、土坑内から土器編年資料として有効な前期後半の土器群や中期初頭～前半にかけての土坑や遺物を検出している。申請地周辺に限れば、弥生時代の遺跡は少ない地域となっている。

古墳時代

集落遺跡では船ヶ谷遺跡2次調査、船ヶ谷遺跡4次調査、大瀬遺跡3次調査がある。船ヶ谷遺跡2次調査では、5世紀前半の多量の土師器が出土した自然流路SR1と祭祀遺構2基などを検出している。船ヶ谷遺跡4次調査では、古墳時代初頭～後期の集落遺構や流路の調査がおこなわれ、陶質土器や軟質土器、非陶邑系須恵器など多量の遺物が出土している。大瀬遺跡3次調査では、前期初頭の堅穴式

建物の確認や自然流路からは多量の遺物が出土している。このほか、6世紀後半の掘立柱建物跡や溝状遺構などを検出している。

申請地のある太山寺山塊丘陵上には高月山古墳群・東山古墳群・北山古墳群・鶴が峠古墳群などの古墳群が数多く分布している。このうち調査地を含む東山古墳群では船ヶ谷向山古墳と船ヶ谷三ツ石古墳の調査がおこなわれている。船ヶ谷向山古墳は、全長32mの前方後円墳で主体部の様相は不明ながら、馬や鶏などの形象埴輪や円筒埴輪を中心とした遺物が多量に出土している。船ヶ谷三ツ石古墳では、2基の円墳を検出し、1号墳の周溝内からは5世紀末から6世紀初頭にかけての須恵器がまとめて出土している。

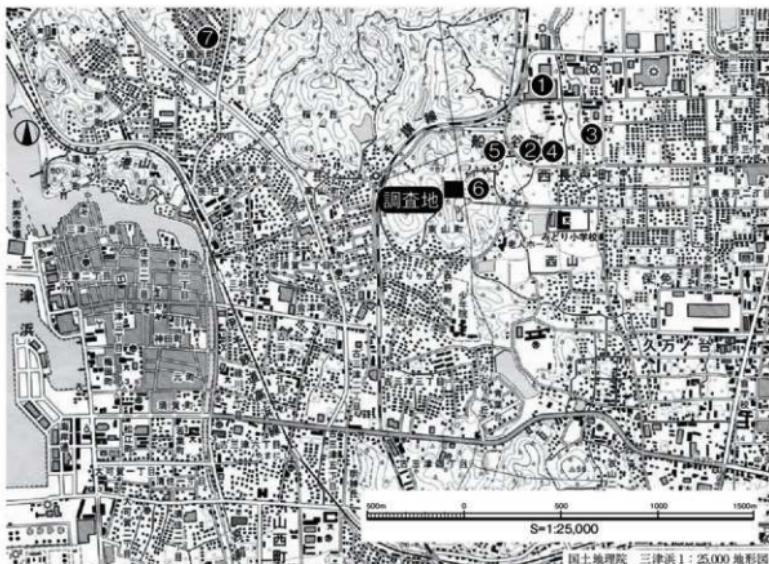
古代・中世

この時期の遺構の検出例は少なく、船ヶ谷遺跡3次調査では、14世紀代の掘立柱建物跡や柵列・井戸などを検出している。

【参考文献】

高尾・山之内 2002『船ヶ谷遺跡－4次調査－』

松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター



- | | | |
|--------------|--------------|------------------|
| 1 船ヶ谷遺跡 1次調査 | 2 船ヶ谷遺跡 2次調査 | 3 船ヶ谷遺跡 3次調査 |
| 4 船ヶ谷遺跡 4次調査 | 5 船ヶ谷向山古墳 | 6 船ヶ谷三ツ石 1号墳、2号墳 |
| 7 鶴が峠遺跡 | | |

第2図 調査地と周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の経過

調査にあたっては、試掘調査によって遺構の検出や遺物の出土があった2地点について、A区、B区と呼称し調査をおこなった。A、B区とも通称東山と呼ばれる北側の南北にのびる尾根筋に所在する。A区は東山と呼ばれる北側の南北にのびる丘陵尾根筋の標高38m付近に所在する。B区は、A区より尾根筋を南へ約20m登った標高42m付近に所在する。調査の工程及び経過は以下である。

(1) A区の調査

平成26(2014)年

11月10日(月) 樹木の伐採作業を開始する。翌日の11日に完了する。

12日(水) 樹木伐採後の現況写真撮影をおこなう。調査地の地形測量をおこなう。

17日(月) 重機を使用してA区の表土掘削作業を開始する。

19日(水) 遺構検出作業を開始する。調査区壁沿いに土層観察用のトレーニング掘削作業をおこなう。

28日(金) 3号墳A主体部を平面的に検出する。

12月5日(金) 3号墳A主体部の掘り下げを開始し、遺物検出作業をおこなう。

15日(月) 基準点設営作業をおこなう。

17日(水) 3号墳A主体部より大刀が出土する。

25日(木) 3号墳A主体部や周溝内の出土遺物の写真撮影をおこなう。

1月7日(水) 3号墳A主体部の測量作業を開始する。

14日(水) 3号墳A主体部床面の玉石の精査、B主体部の床面の精査をおこなう。

2月2日(水) A区の土層観察用ベルトの撤去作業を開始する。SK3の土層精査及び測量作業。

12日(木) 検出した土坑などの掘削をおこなったのち、A区の地山測量作業をおこなう。

13日(金) 現地説明会の資料作成。

22日(日) 現地説明会を開催する。

23日(月) 3号墳A主体部床面の玉石の撤去作業をおこなう。

26日(木) 重機を使用し、A区の埋め戻しをおこなう。

27日(金) A区の埋め戻しを完了する。

(2) B区の調査

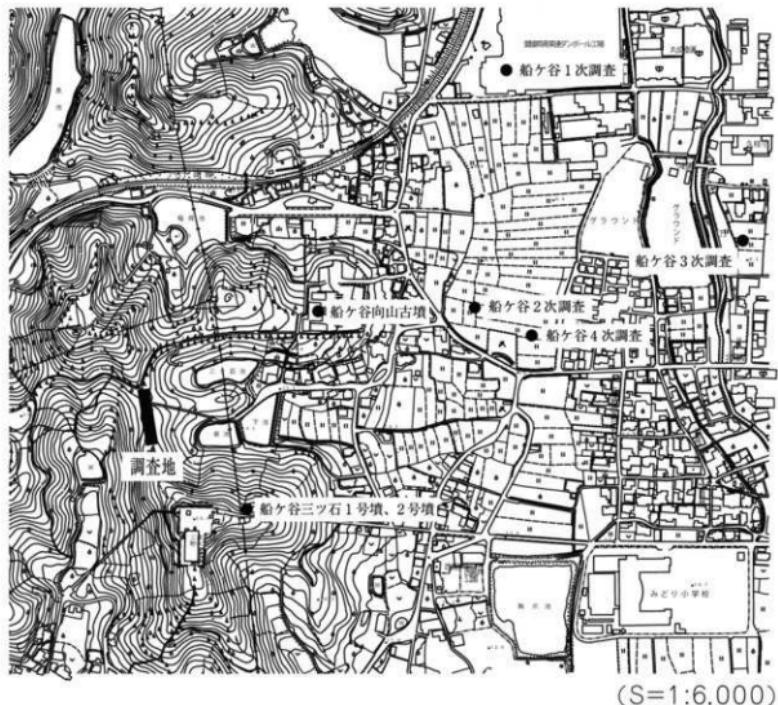
11月18日(火) 樹木の伐採作業を開始する。

12月2日(火) 調査区の壁沿いに土層観察用のトレーニング掘削作業を開始する。

10日(水) 4号墳の北側墳丘部に埴輪列を検出する。東壁のトレーニングに4号墳の主体部の一部を検出する。

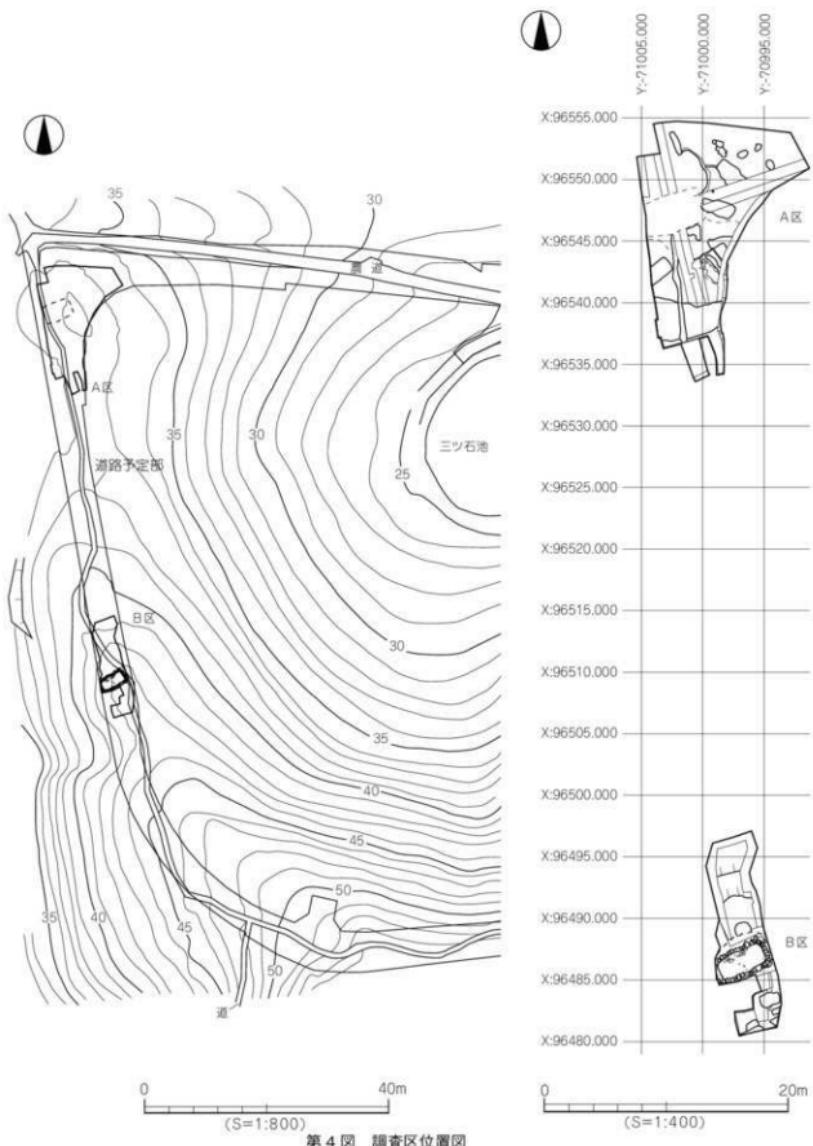
調査の概要

- 25日（木）B区の表土掘削作業を開始する。
- 1月14日（水）4号墳主体部の掘り下げを開始し、石室内に落下した石材の撤去作業をおこなう。
- 21日（水）4号墳石室内落下石材の撤去を終了し、石室内埋土の掘り下げをおこなう。
- 2月 4日（水）4号墳石室内の副葬品検出作業をおこない鉄錐、耳環、管玉、ガラス玉、切子玉、棗玉などが出土する。
- 22日（日）現地説明会を開催する。
- 3月 2日（月）4号墳埴輪列写真撮影。SK1掘削作業。石室内玉石測量。
- 4日（水）4号墳石室内の玉石撤去作業。撤去作業中に勾玉出土。
- 6日（金）4号墳北東部側の墳丘下に壺棺1を検出する。
- 11日（水）4号墳北側の墳丘下に壺棺2を検出する。
- 12日（木）壺棺2の測量、取り上げをしたのち、B区の完掘状況の写真撮影をおこなう。
写真撮影終了後、重機を使用し埋め戻しをおこなう。
- 13日（金）埋め戻し作業を完了し現場作業を終了する。



第3図 調査地位置図

調査の概要



第Ⅳ章 A 区の調査

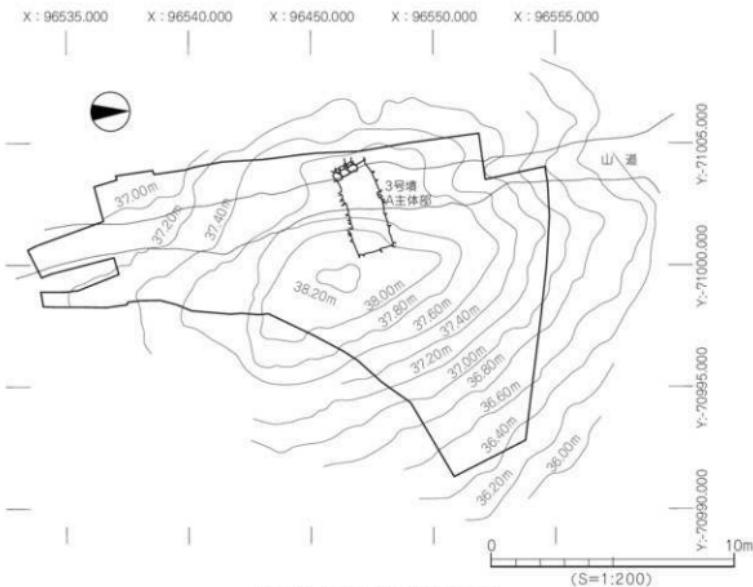
第1節 検出遺構

A 区は、水源地のある東山の頂部より北側にのびる尾根筋を下った勾配が緩やかになり平坦面を形成する標高 34 ~ 38m に立地する。検出した主な遺構は古墳(船ヶ谷三ツ石 3 号墳)1 基、土坑(SK)2 基、性格不明遺構(SX)1 基である。古墳名については、平成 2 年に東山の頂部付近に電波塔建設に伴う調査がおこなわれ、主体部不明ながら 2 基の古墳に伴う周溝が確認された。それ故、地名より船ヶ谷三ツ石 1 号墳、2 号墳として調査がおこなわれている。このことから、A 区の調査で見つかった古墳を船ヶ谷三ツ石 3 号墳として調査をおこなった。なお、3 号墳は 2 基の主体部を検出したため、それぞれ A 主体部と B 主体部と呼称し調査をおこなった。

第2節 船ヶ谷三ツ石 3 号墳

(1) 位置と現状(第5図)

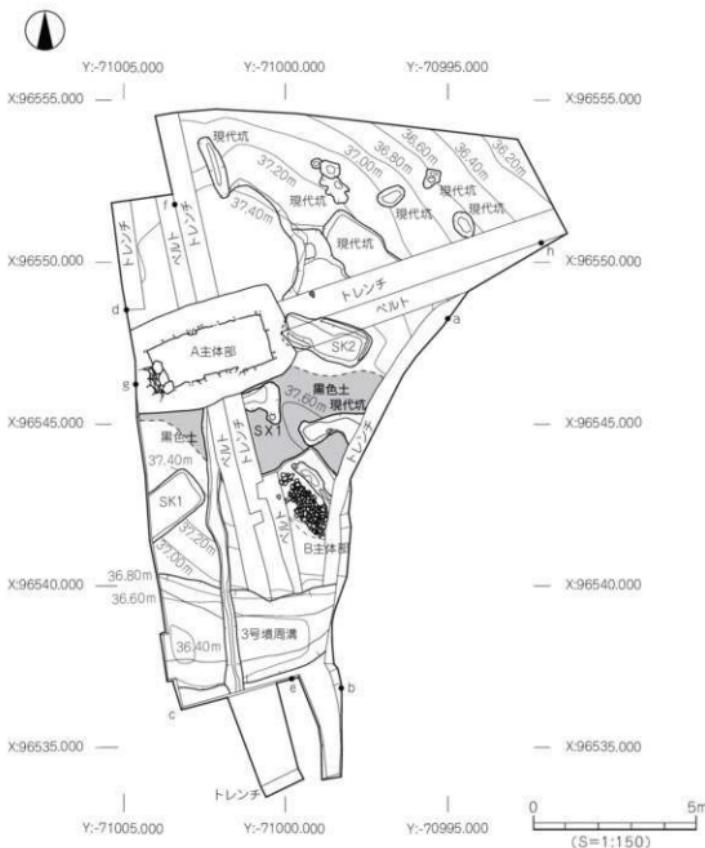
船ヶ谷三ツ石 3 号墳は、東山の頂から北側にある北山にむかって緩やかに下る尾根筋の平坦部に位



第5図 A区調査前の地形測量図

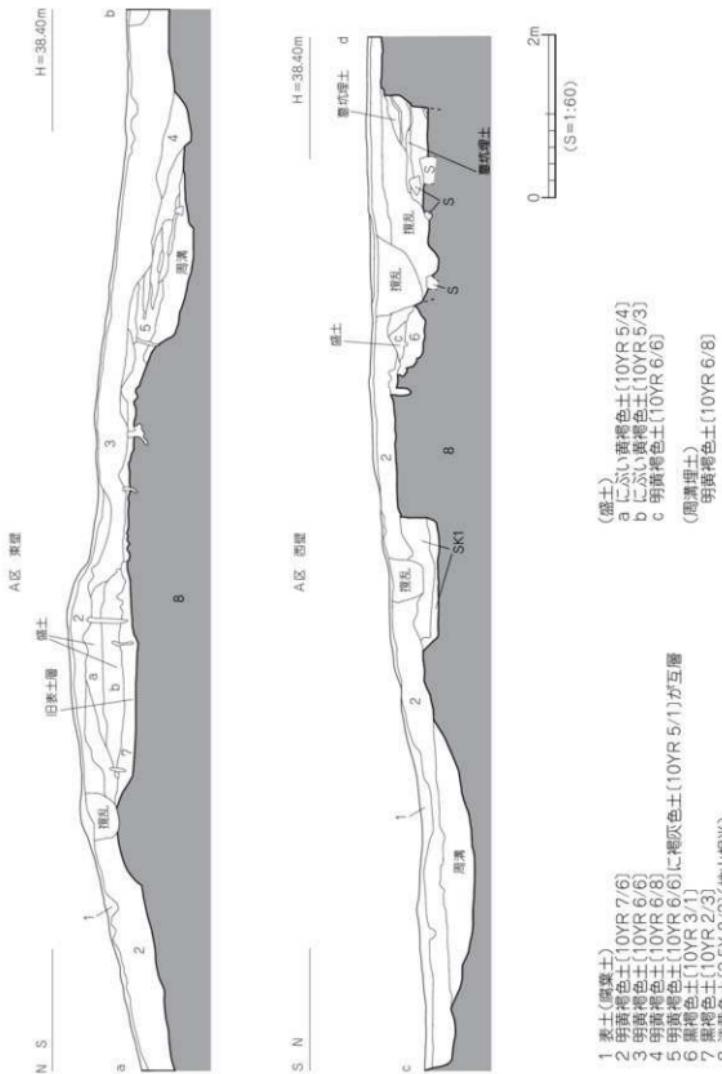
置する。この尾根の東側と西側は緩く傾斜する谷地形となっている。

調査前の現況は、雑草や雑木が生い茂った荒れ地が大部分を占め、西側は人が通るほどの山道と一部のミカン栽培地となる。荒れ地部分についても部分的にミカンの木が残っていることから、過去には農地として利用されていたようである。調査は調査地に生い茂る樹木の伐採からおこなった。伐採については幹回りが1mを超えるものについては伐採をしていない。調査地全体は、ある程度平坦に造成がされていることが想定されるが、石室付近は僅かに盛り上がり、古墳の存在が地形的外観からも推察されるものであった。3号墳からの眺望は、東に船ヶ谷向山古墳跡をはじめ平野部を眼下に見渡せる見晴らしのいい景観となっている。

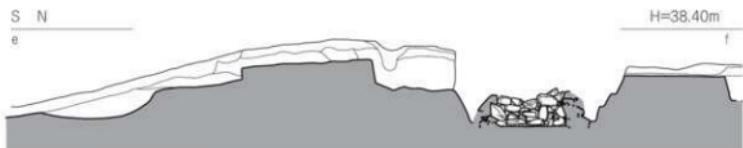


第6図 A区遺構配置図

船ヶ谷道路5次調査



第7図 A区調査区壁土層図



3号墳A主体部短軸見通し断面図



3号墳A主体部 長軸見通し断面図

第8図 3号墳墳丘土層図

(2) 墳丘と墳形 (第6～8図)

墳丘の盛土は、北側から西側にかけてすべて失われ、東側から南側にかけての一部で盛土を確認したのみである。盛土は、旧表土層と考えられる黒色土の直上から構築され、層厚 20～50cm、2 層の盛土を確認したが細かな版築はおこなわれていない。黒色土のない部分は、削平のためか盛土と思われる土層は検出していない。とくに、A 主体部の北から北東にかけては削平が著しく、古墳に伴う地山整形についても不明である。A 主体部中央から南側 7m には、外部施設として周溝を検出している。A 主体部の南側だけに限られ、北側では検出していない。このため墳形についても明確ではない。

(3) A 主体部墓坑 (第9図)

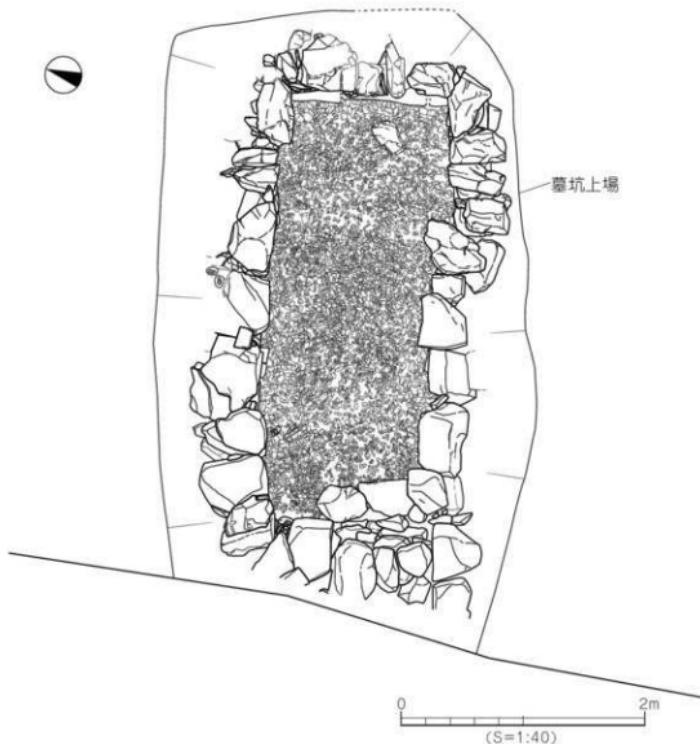
墓坑は、丘陵平坦部に掘られる。旧表土面と地山面とで検出した。南側で旧表土層の黒色土を切って掘られていることを確認し、他の部分では削平のため、地山面での検出である。玄門付近から西側は調査区外となるため石室の全容は不明である。墓坑の平面形態は隅丸長方形を基本にするが南側では玄門付近に向かってやや幅狭となっている。検出規模は長さ 4.8 m、幅 2.6～2.9 m、深さ 0.8～1.3 m を測る。奥壁側が遺存状態が良好で深く残っている。

(4) A 主体部石室（第10図）

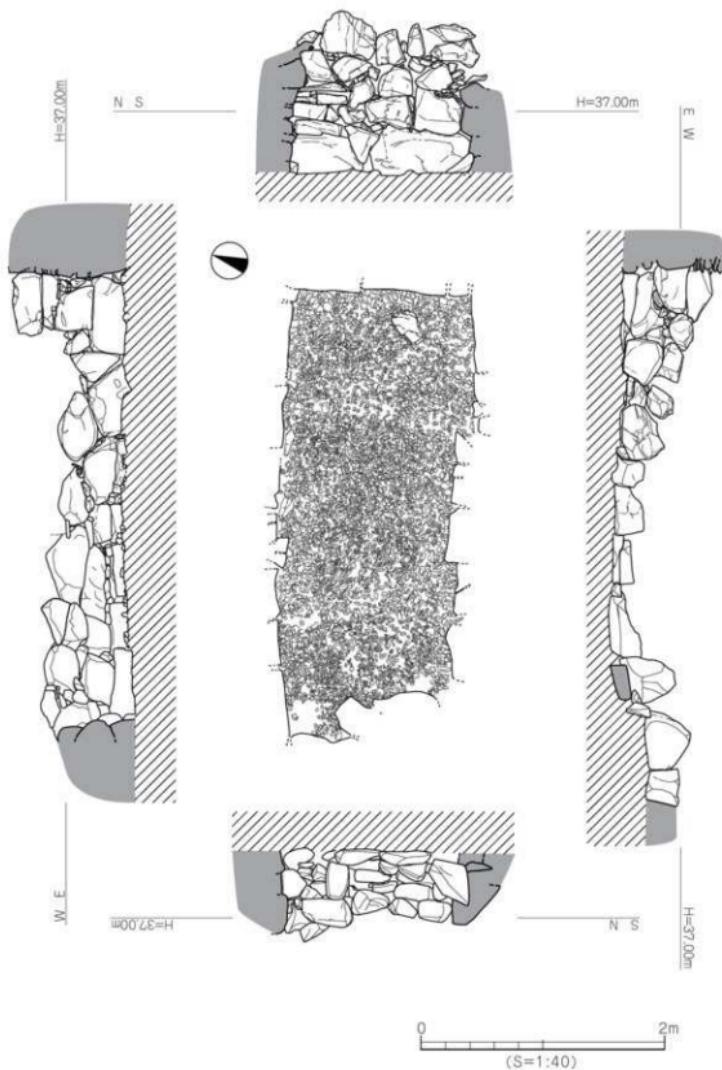
A主体部は西側に開口する右片袖の横穴式石室で、主軸方位をE 18° Nにとる。石室規模は検出長43m、幅1.4～1.5m、室高0.2～1.3mを測る。天井石は失われ、奥壁や側壁も搅乱され一部は石室内に落下しているが量的には少なかった。壁体は一段～五段程度を残すのみであった。とくに、南側の側壁はひどく破壊され基底石まで搅乱の影響をうけている。羨道部は西側が調査区外となり羨道部形態の全容や前庭部については不明である。羨道の検出規模は幅0.8m、長さ0.7mを測る。玄門部には、閉塞石と思われる石積みが二段残る。羨道部から玄室には段を降りる構造となっている。

(5) A 主体部玄室（第10図）

玄室規模は長さ3.6m、幅1.4～1.5m、残存高は奥壁側で1.3mを測る。平面形態は、南側の基底石が搅乱により玄室側に押されているが長方形を呈している。使用石材の大きさに見る特徴には、奥壁



第9図 3号墳墓坑とA主体部測量図



第10図 3号墳A主体部測量図

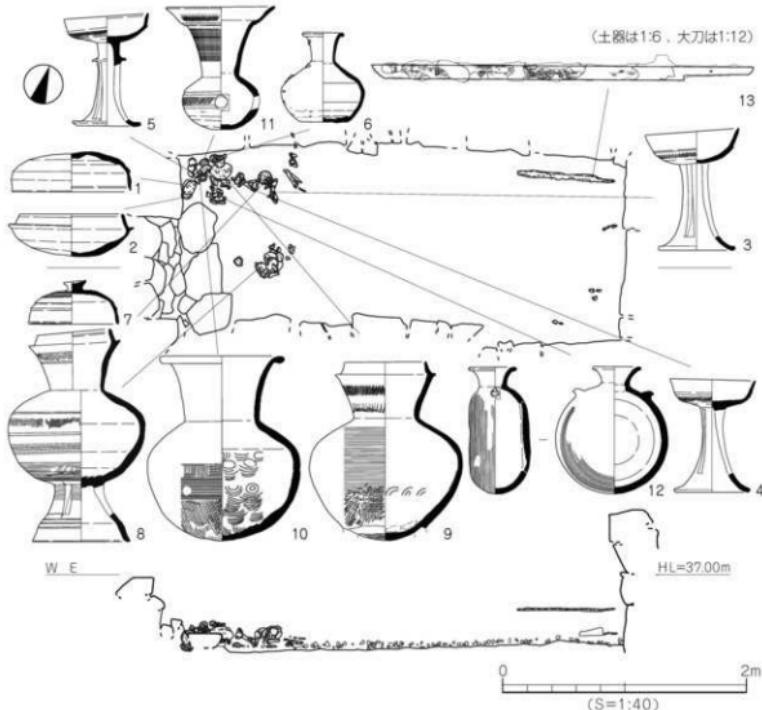
の基底石に巨石2個を使用し、側壁中央部の基底石には上部より小ぶりな石を使用していることである。

床面は直径0.5～2.5cmの玉石が地山上に敷かれ、床面全体が礫床となる。床面の高さは奥壁側が少し高くなっている。

玄門部は片袖となり、玄室に入るには段（2段）を降りる構造となっている。玄室の入口には平坦面を上にした平石3個を並べて階段状の施設を造っている。

(6) A 主体部石室内遺物出土状況（第11図）

遺物は玄室内から出土している。遺物には須恵器、鉄製品があり、土師器や装飾品は1点も出土していない。遺物の出土状況は玄室左奥、玄室北西隅、玄室入口部とに大別できる。玄室左奥では大刀が床面より20cm上で出土し、玄室北西隅では須恵器の壺身、壺蓋、高壺、壺、甌、提瓶などの土器類や鉄鎌、刀子、轡などの鉄製品がまとめて出土している。玄室入口部では須恵器の脚付壺が1個体分出土している。



第11図 3号墳A主体部出土遺物測量図

(7) 石室内出土遺物

須恵器 (第 12・13 図)

坏蓋 (1)

1はやや扁平な天井部。稜は丸く不明瞭。口縁部内面に段をもつ。

坏身 (2)

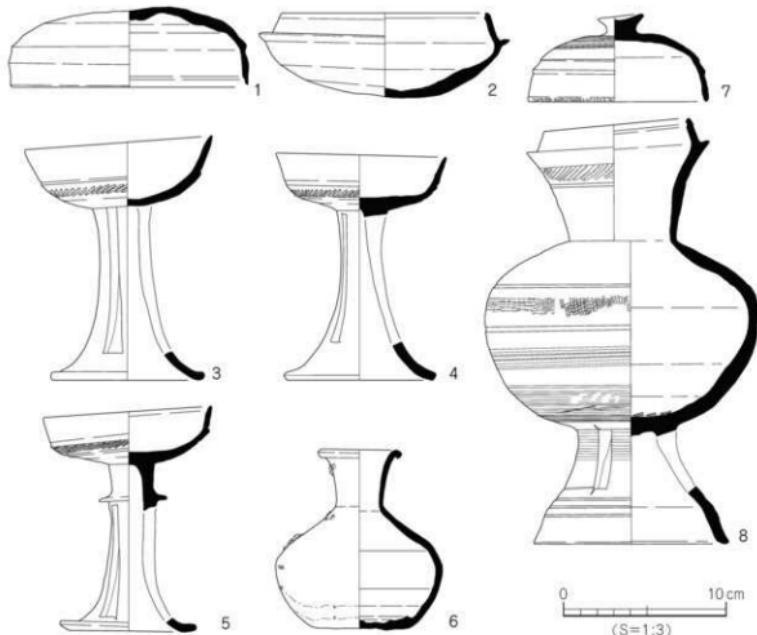
2は坏身。たちあがりの口縁部内面に段をもつ。受部は短く上方にのびる。底部は丸い。

無蓋高坏 (3～5)

3～5は玄室北西隅で出土した。長脚で三方向に長方形のスカシが施されている。3は口径 11.4cm、器高 15.0cm を測る。坏体部外面には斜位の刺突文が施される。4は口径 10.4cm、器高 13.8cm を測る。坏体部外面には斜位の刺突文が施される。5は口径 10.2cm、器高 13.5cm を測る。坏体部外面には波状文が施される。脚部には薄い盤状の突帯が施される。

長頸壺 (6)

6は口径 5.1cm、器高 11.2cm、底径 6.2cm を測る。口縁端部は外に肥厚する。胴中位に最大径を測り、底部は安定した平底である。



第 12 図 3号墳 A 主体部出土遺物実測図 (1)

蓋 (7)

7は口径11.0cm、器高5.4cmを測る。ツマミ中央部は凹む。天井部は丸味をおびる。稜は丸い。口縁部は丸くおさめる。口縁部外面に刻目が看取される。

脚付有蓋壺 (8・9)

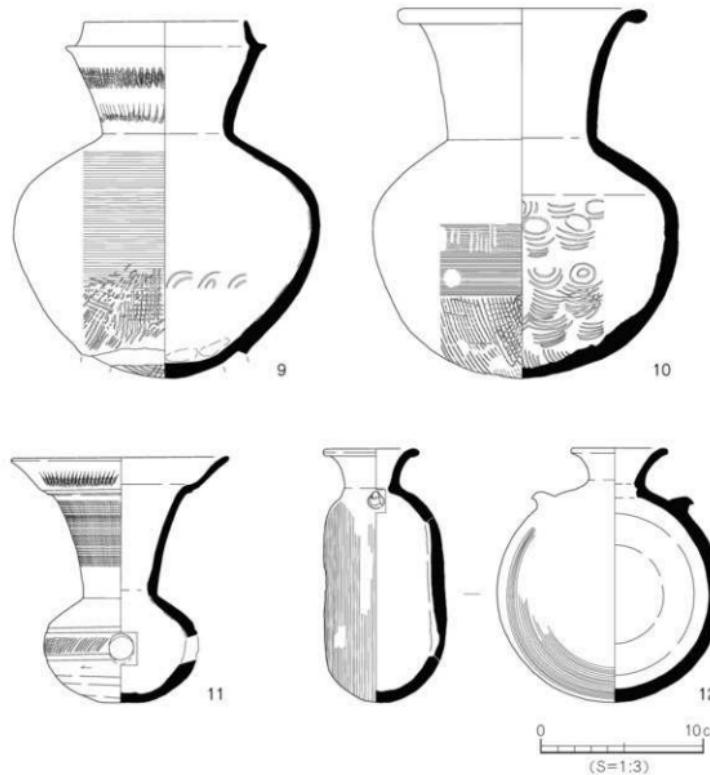
8は口縁部内面に段をもち端部は丸く仕上げる。頸部外面に波状文、胴部に櫛歯状工具による刺突文を施す。脚部には、三方向に長方形のスカシを施す。9は口縁端部は丸く仕上げる。受部は短く水平にのびる。頸部に2段の波状文を施す。底部外面に脚部の接合痕跡を残す。

広口壺 (10)

口径14.5cm、器高22.7cmを測る。口縁部は外反し端部は肥厚する。底部は丸底。

甌 (11)

頸部と口縁部の境に段をもつ。口縁部外面に波状文、胴部外面に沈線2条で区画された文様帶には



第13図 3号墳A主体部出土遺物実測図(2)

櫛歯状工具による刺突文が施される。

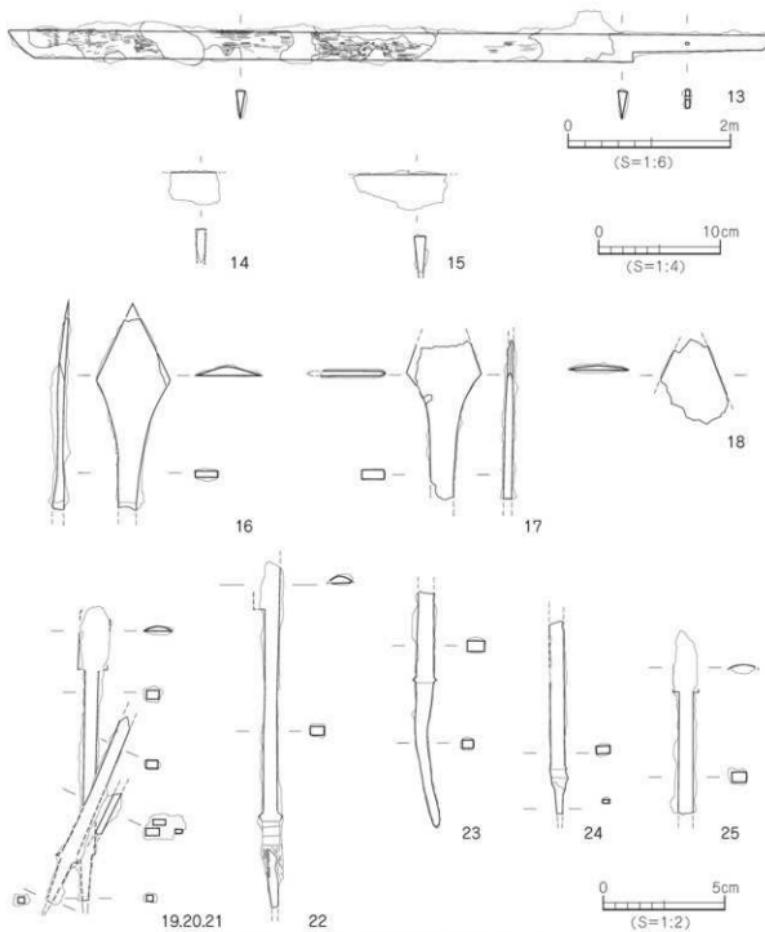
提瓶 (12)

口縁部は外反する。端部は丸い。把手は退化しカギ状の突起となる。

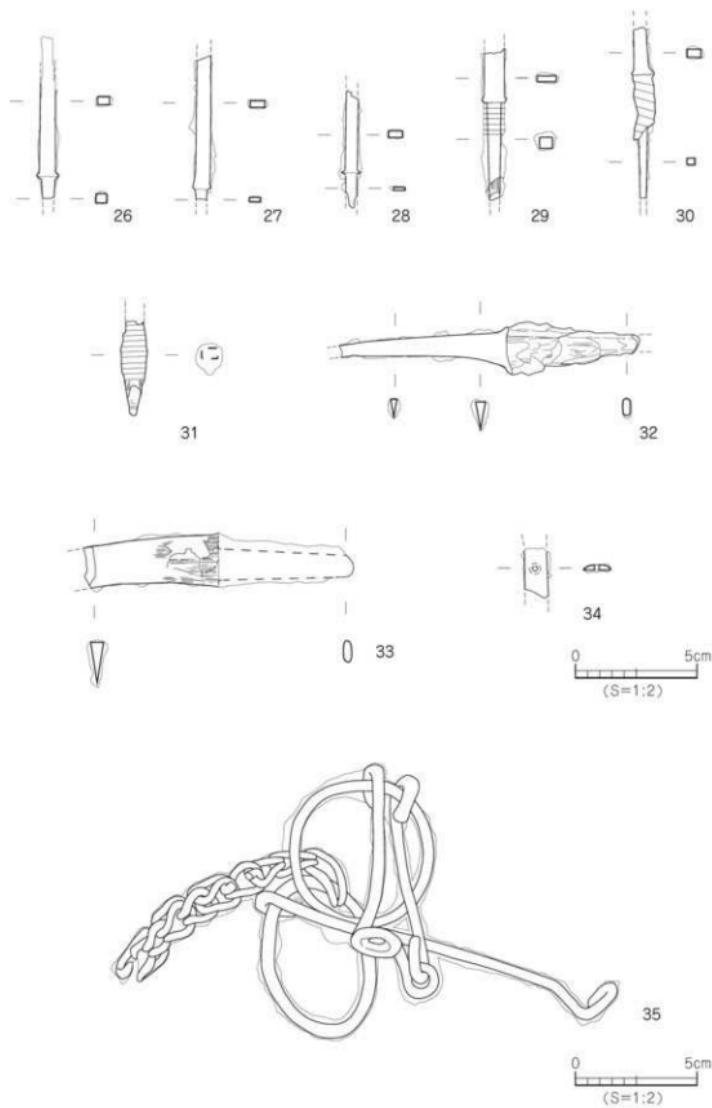
鉄製品 (第 14 ~ 16 図)

大刀 (13 ~ 15)

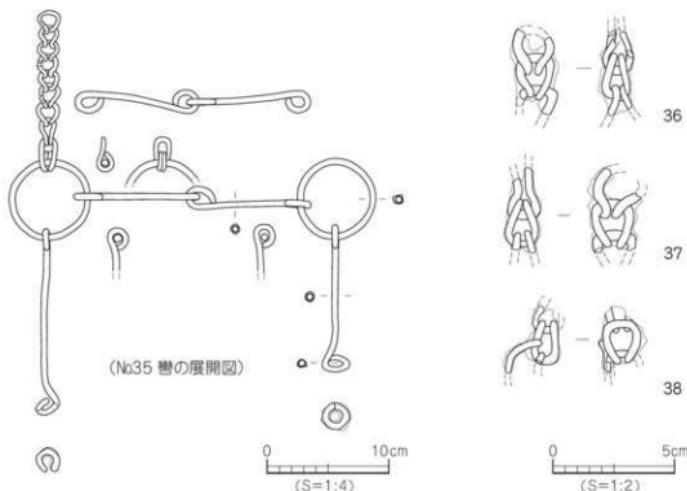
13 は玄室左奥の出土で長さ 94cm、重さ 1.361 g を測る。14・15 は刀身部片で同一のものと思われる。



第 14 図 3 号墳 A 主体部出土遺物実測図 (3)



第15図 3号墳A主体部出土遺物実測図(4)



第16図 3号墳A主体部出土遺物実測図(5)

鉄鎌(16~31)

16~18は平根の主頭鎌。19~31は細根の長頭鎌である。22は片刃式。完存品は無くほとんどが茎部や頭部の破片である。22・24・29~31は樹皮を巻いた痕跡が看取される。

刀子(32・33)

刀部から柄部にかけての破片である。32は現存長12.3cmを測る。柄部に木質が残る。33は現存長11.0cmを測る。柄部は鹿角製である。刃部に木質が残る。

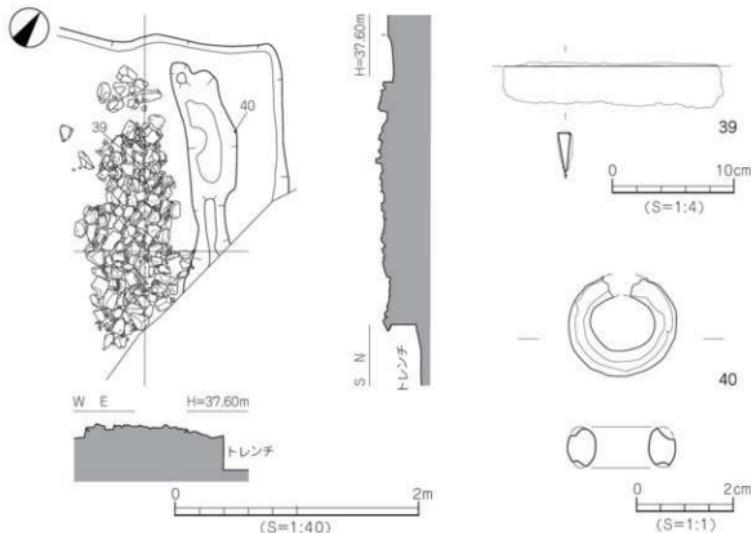
馬具(34~38)

玄室西北部での出土である。34は鞍金具の破片と思われる。35は轡。鏡板・引手が完存する。鏡板は外形6.8cmの素環である。引手は左側が長さ15.4cm、右側が12.4cmを測る。引手の長さに違いがみられる。36~38は兵庫鎖の破片である。

(8) B主体部の検出状況(第17図)

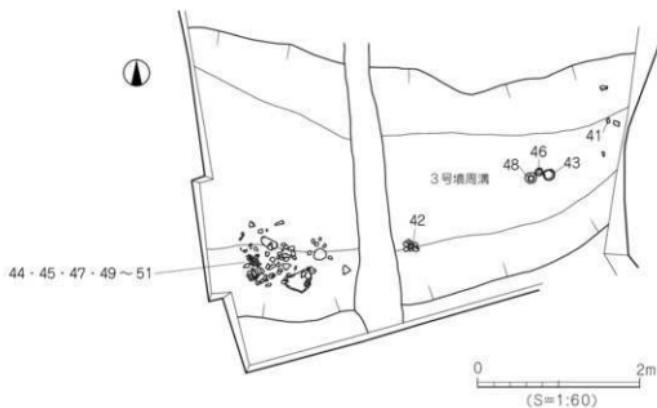
B主体部は、A主体部の南東側約5mに位置する。玄室床面の一部しか検出していない。人為的な土地の開発によって壁体はすべて失われている。よって、石室形態は不明である。床面は扁平な割石の上に直径1~25cmの玉石が敷かれている。床面の北東側には、基底石の抜き跡とみられる溝状の窪みと墓坑と考えられる掘り方を一部検出した。墓坑は旧表土と考えられる黒色土と地山をわずかに切って掘られている。検出規模は東西180m、南北120m、深さ0.06mを測る。遺物は床面で大刀の破片1点と基底石の抜き跡痕跡より耳環1点が出土している。

船ヶ谷遺跡 5 次調査



第17図 3号墳B主体部測量図

第18図 3号墳B主体部出土遺物実測図



第19図 3号墳周溝測量図

(9) B 主体部出土遺物 (第18図)

大刀 (39)

39は床面で出土した。残存長18.1cm、幅3.6cm、厚さ1.5cmを測る。

耳環 (40)

40は基底石の抜き跡から出土した。銅芯銀板張の耳環である。直径2.05cmを測る。

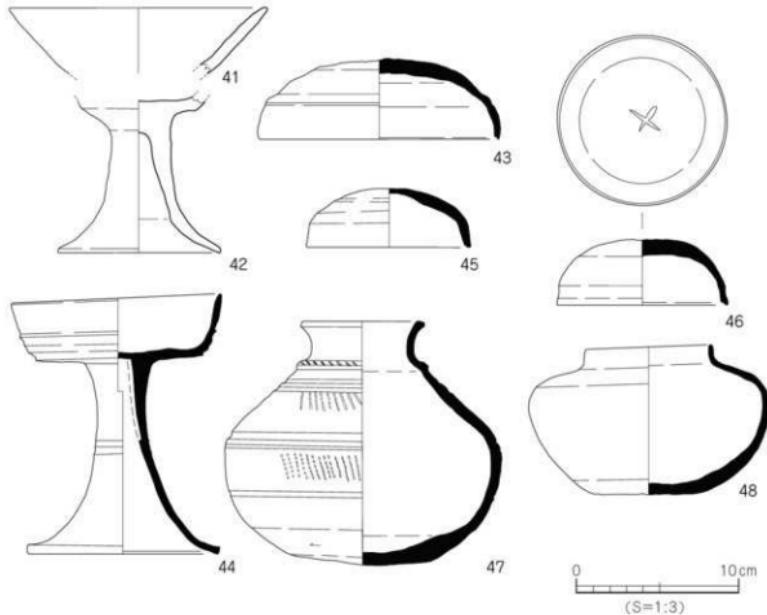
(10) 周溝の検出状況 (第19図)

周溝はA主体部の南側7mで検出した。検出規模は幅2.3~3.4m、深さ0.4~0.6mを測る。西側が広く、東側が狭くなっている。断面形態は西側で船底状、東側では逆台形状となる。遺物は土師器、須恵器が出土している。

(11) 周溝内出土遺物 (第20・21図)

土師器 (41・42)

41・42は高杯。41は坏部で外上方に立ち上がる口縁部片。42は接合部~脚部にかけての破片で脚裾は緩やかに外に開く。



第20図 3号墳周溝出土遺物実測図(1)

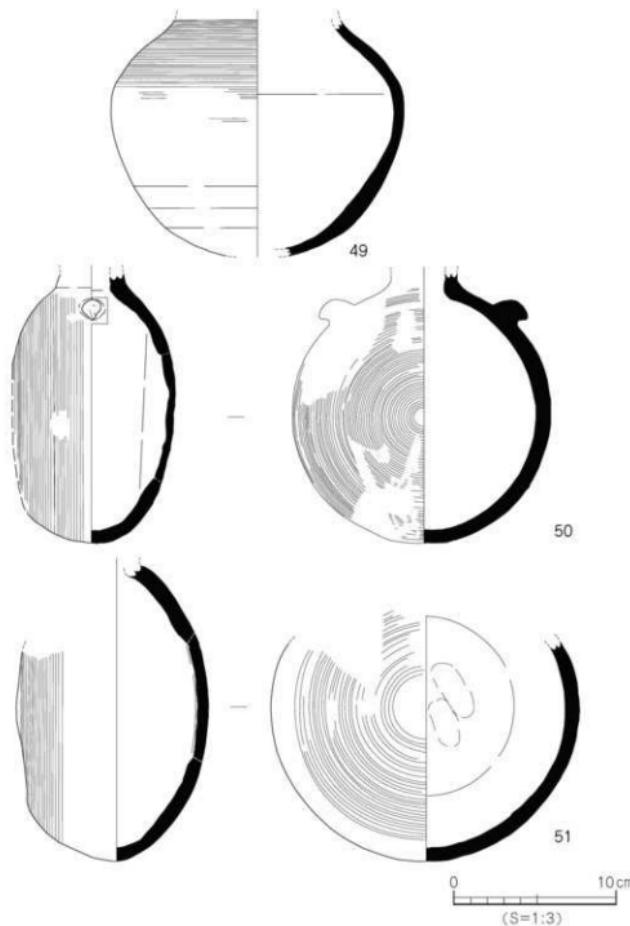
須恵器 (43 ~ 51)

蓋坏 (43)

43は坏蓋。天井部はやや丸味をもつ。縁は純く丸い。口縁端部はわずかに段をもつ。

高坏 (44)

44は長脚でスカシが施されない。坏部は口縁部と体部の境に段をもつ。口縁端部は丸くおさめる。



第21図 3号墳周溝出土遺物実測図(2)

蓋 (45・46)

45・46の天井部は丸く稜も見られない。口縁端部は内傾する面をもつ。46の天井部には「×」のヘラ記号が施される。

壺 (47～49)

47・48は短頸壺。47は平底の底部から内湾して立ち上がる胴部。胴部の最大径を中位にもつ。頸部に刻目突帯、肩部と胴中位に櫛齒状工具による刺突文が施される。48は平底の底部から内湾して立ち上がり肩の張る胴部。口縁部は短く上方にのびる。49は底部と頸部以上が欠失する。

提瓶 (50・51)

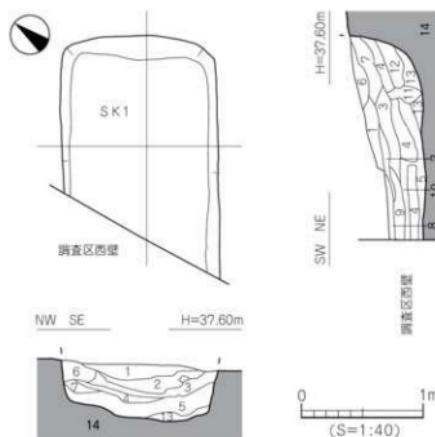
50は口縁部が欠失。把手は丸いカギ状となる。51は体部片。口縁部と把手は欠失する。

第3節 その他の遺構と遺物

(1) 土坑 (第22・23図)

SK1

SK1は、調査区西側の3号墳A主体部の南西端から南約2mに位置する。土坑の南西側は調査区外となり全容は不明である。平面形態は検出状況より隅丸長方形と考えられる。検出規模は長軸1.80m、短軸1.30m、深さ0.30～0.56mを測る。土坑墓と考えられるが遺物は1点も出土せず時期、性格とも不明な土坑である。



- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色土 [10YR 7/3] | 8 浅黄褐色土 [10YR 8/4] |
| 2 灰黄褐色土 [10YR 6/2] | 9 にぶい黄褐色土 [10YR 7/3] |
| 3 にぶい黄褐色土 [10YR 7/4] | 10 にぶい黄褐色土 [10YR 6/4] |
| 4 灰黄褐色土 [10YR 5/2] | 11 浅黄褐色土 [10YR 8/3] |
| 5 明黄褐色土 [10YR 7/6] | 12 褐灰色土 [10YR 4/1] |
| 6 にぶい黄褐色土 [10YR 7/2] | 13 棕色土 [5YR 7/8] |
| 7 黄褐色土 [10YR 8/8] | 14 黄色土 [2.5Y 8/6] (地山相当) |

第22図 SK1測量図

SK2

SK2は、3号墳A主体部の東側で検出した土坑墓と考えられる土坑である。西側の一部は3号墳の墓坑に切られる。平面形は、隅丸長方形を呈する東西方向の土坑である。土坑の北東部と南西部では、検出面から40～50cm下方が段堀構造となる。段掘りの平坦面や土坑底面には部分的に白色粘土が貼りつく。検出規模は長さ2.6m、幅1.00～1.20m、深さ0.70mを測る。土坑内では遺物(副葬品)の出土もなく、人骨や木質なども検出していない。

(2) 性格不明遺構 (第24図)

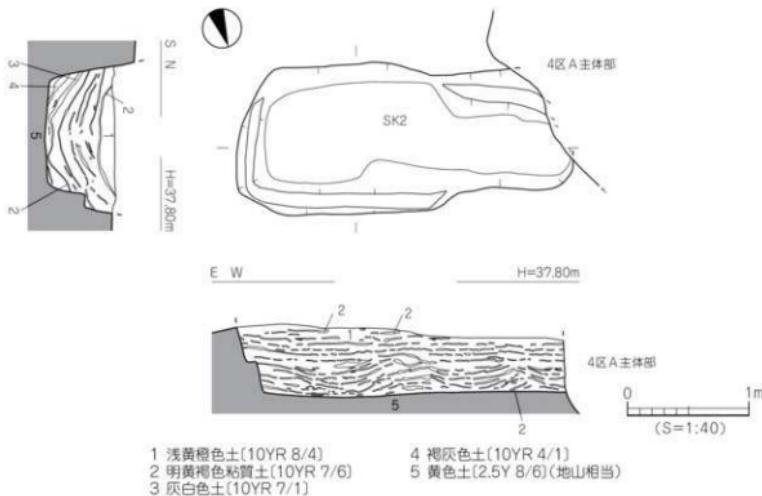
SX1

SX1は、3号墳の南側で検出した東西方向の浅い不整形な窪みである。南側はトレンチで切られるが、トレンチ内にそ

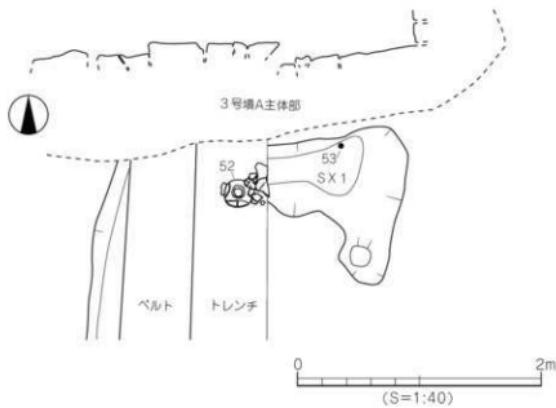
の範囲は及ぶものと考えられる。検出規模は東西 1.12 m 以上、南北 0.50 ~ 1.30 m、深さ 0.03 ~ 0.08 m を測る。遺物は弥生土器、石器が出土している。

出土遺物（第 25 図）

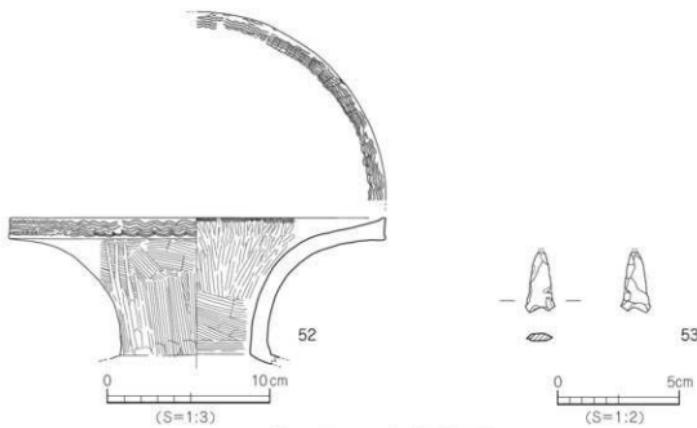
弥生土器（52）



第 23 図 SK2 測量図



第 24 図 SX1 測量図



第25図 SX1出土遺物実測図

52は広口壺。胴部以下は欠失する。口縁部は外反し大きく水平にのびる。口縁端部外面と上部に波状文を施している。

石鎌 (53)

53は無茎の打製石鎌。石材はサスカイト製である。先端部は欠失する。

(3) その他の出土遺物 (第26図)

A主体部の南側で検出した黒色土中からの出土遺物である。

石鎌 (54)

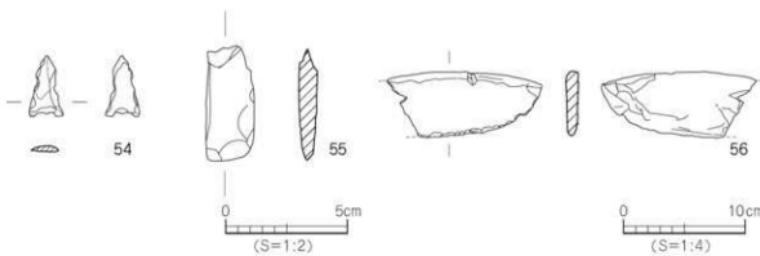
54は完形品で無茎の打製石鎌である。石材はサスカイト製である。

石斧 (55)

55は扁平片刃石斧の破片である。材質は緑色片岩である。

石包丁 (56)

56は外湾刃の石包丁である。材質は緑色片岩である。



第26図 黒色土出土遺物実測図

第V章 B区の調査

第1節 検出遺構

B区は、A区から南へ尾根筋を約50m上った緩やかな平坦面を形成する標高40~43m付近に立地する。検出した主な遺構は古墳（船ヶ谷三ツ石4号墳）1基、壺棺2基、土坑（SK）5基である。古墳名については、A区の調査で見つかった船ヶ谷三ツ石3号墳に引き続き船ヶ谷三ツ石4号墳として調査をおこなった。

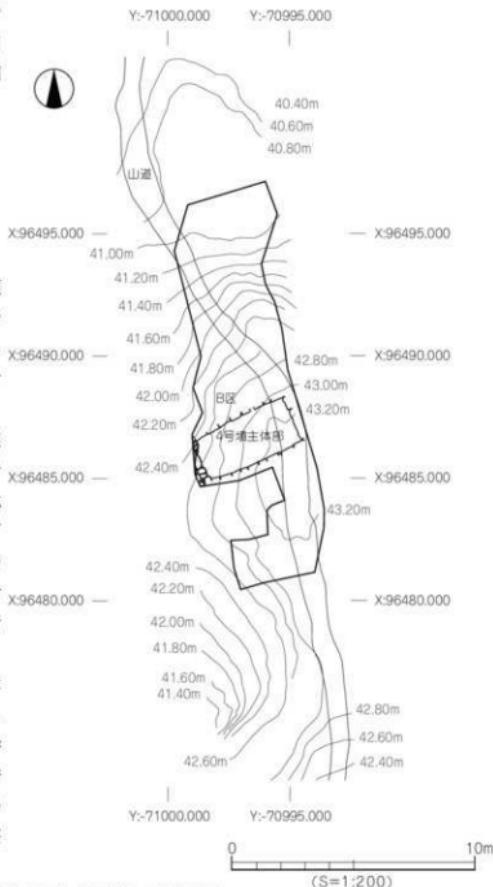
第2節 船ヶ谷三ツ石4号墳

(1) 位置と現状

船ヶ谷三ツ石4号墳は、東山の頂から北側にある北山にむかって緩やかに下る尾根筋の平坦部に所在し、3号墳の南約50mの標高約43m付近に位置する。

調査開始時の4号墳からの眺望は、背の高い樹木により視界不良であったが、これら樹木がなければ北側に3号墳や船ヶ谷向山古墳を見下ろすほか、東に山越から和気方面の平野部と西側は三津、吉田方面と伊予灘が見渡せる見晴らしのいい場所に立地する。

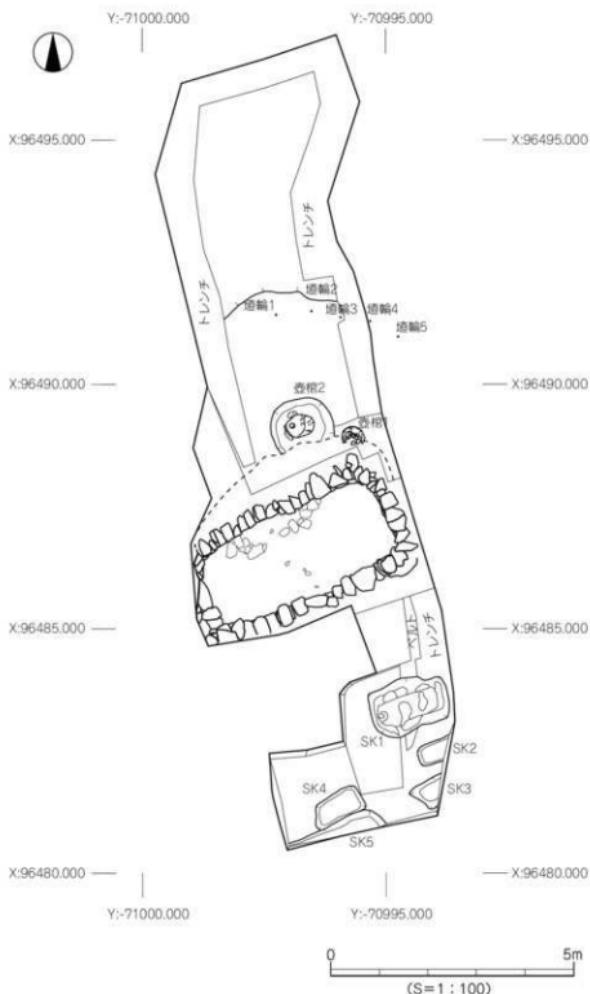
調査前の状況は、雑木林で、調査は調査地に生い茂る樹木の伐採から行った。伐採が必要な樹木のうち、幹回りが1m以上のものについては安全のため伐採を行っていない。このため4号墳石室のすぐ南側にある桜の木は残すこととなった。



第27図 調査前のB区測量図

(2) 墳丘と墳形(第27図)

墳丘は、石室北側と南側の東壁に厚さ5~30cm程度の盛土が黒色土上に認められる。墳形は、3号墳と同様に東側と西側が調査区外となることや南側は人為的な削平のため全容は不明である。北側は、地



第28図 B区遺構配置図

山形がおこなわれ、段落ちとなる。4号墳では、1基の主体部と埴輪列を検出した。周溝は未検出である。

(3) 墓坑(第28・29図)

墓坑は、丘陵平坦部に掘られる。旧表土と考えられる黒色土面で検出した。尾根筋に直交して掘られる。他の部分では削平や未掘削、調査区外となるため墓坑の全容は不明である。完掘は行わず奥壁と北側の一部を掘り下げたのみである。なお、北側の墓坑掘削時には壺棺1を検出している。検出規模は長さ53m、幅32m以上、深さ0.8~13mを測る。

(4) 石室(第30・31図)

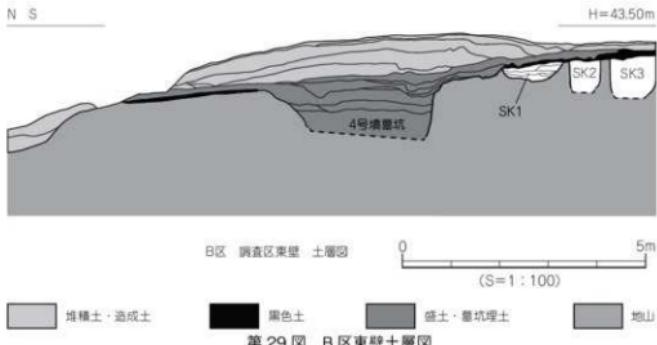
石室内には、人為的攪乱によって多量の土砂とともに天井石、壁体の一部が石室内に落下していた。特に石室南西部の攪乱がひどく、基底石の上3段目まで達している。羨道部は、調査区外となり全容は不明である。玄門部では、攪乱されているものの框石と袖石が確認できた。框石には横長の大きな緑色片岩が使用されている。框石の状況から、羨道部から玄室へは、段を降りる構造となっている。

(5) 玄室(第31図)

玄室床面には、奥壁から入口側1.0 m の間に直径1~3cmの角礫を5cm程度の厚さで敷き詰めて礫床とするほか、北側中央の側壁沿いに直径5~15cmの花崗岩の割れ石16個を使用し側壁に沿って長さ1.4m、幅0.3m程の区画部を設けている。区画された床面は直径1~2cmの角礫を含んだ灰白色の粘土が3cm程度の厚さで敷かれていた。奥壁の基底石には、花崗岩と横長の石英粗面岩の2個の巨石を使用する。玄室規模は長さ4.1m、幅1.9~2.0m、高さ1.65mを測る。やや玄門部が狹まっている。

(6) A主体部石室内遺物出土状況(第32・33図)

遺物は玄室内で土師器の壺、高壺、須恵器蓋壺、短頸壺、広口壺、甕、装飾品では耳環4点、切子玉2点、管玉3点、勾玉1点、棗玉（埋もれ木製）1点、ガラス小玉、土玉などが出土した。耳環のうち1点は直径3cmを測り、松山平野で出土したものでも最大級である。石室埋土中からも大量の埴輪片を採取している。



る。遺物の出土状況は、奥壁側の砾床部の北側から入口にかけて装飾品が多く出土し、玄室入口の左側から土師器、須恵器の土器類がまとまって出土している。

(7) 石室内出土遺物

土師器（第34図）

壺（57・58）

57は丸底の底部。体部と口縁部境に段を持つ。口縁端部は丸い。内外面ともヘラミガキが施される。

58は平底の底部。内湾して立ち上がる口縁部。

高壺（59～62）

59～62の口縁部は外上方に立ち上がる。脚裾は屈曲して外方に開く。

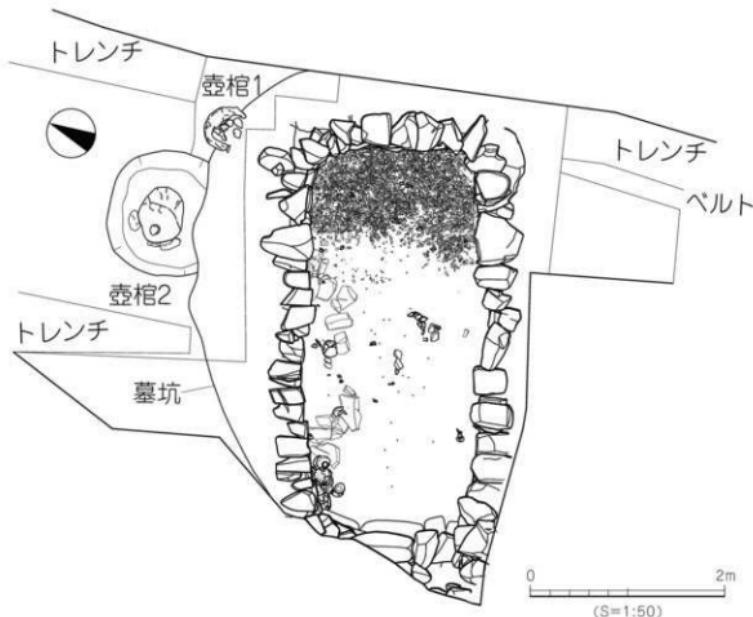
須恵器（第34・35図）

壺身（63～65）

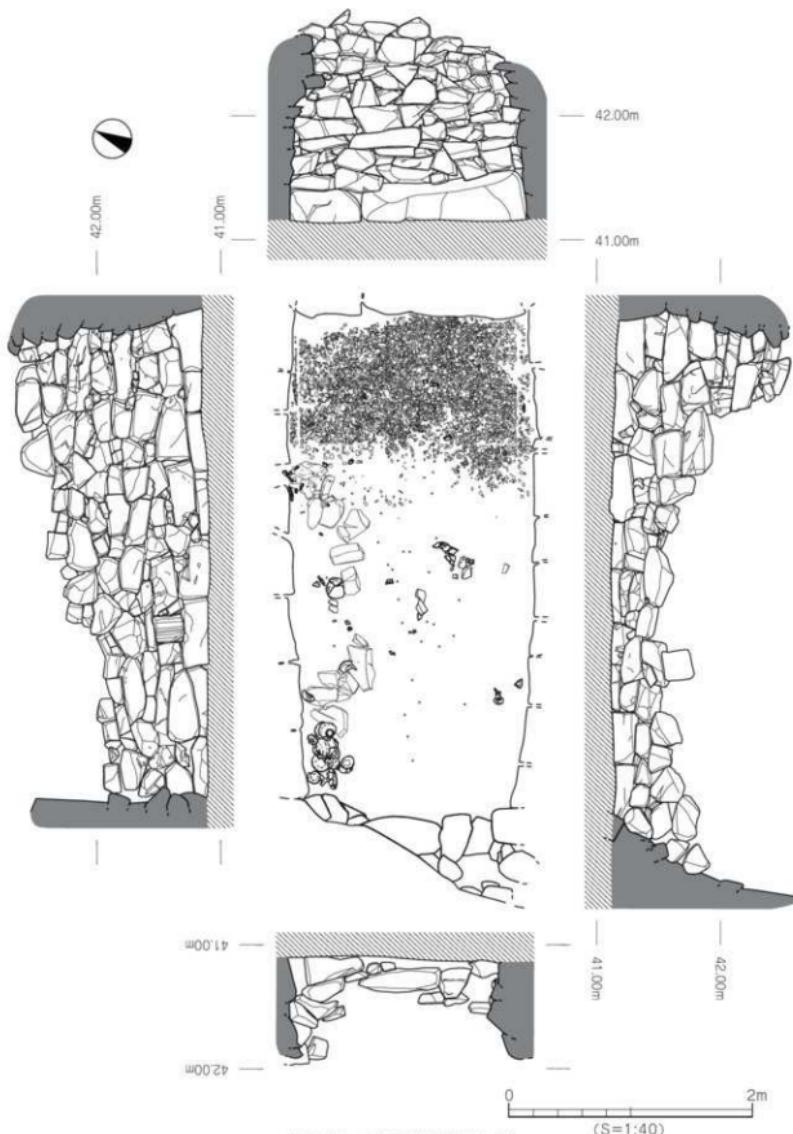
63のたちあがりは内傾し端部は面をもつ。底部は平たい。64のたちあがりは内傾し端部は丸い。底部は平たい。65のたちあがりは短く上方にのびる。端部は丸い。

高壺（66～68）

66は内湾して上方に開く口縁部。脚裾は短く水平にのびる。脚端は上下に肥厚する。67は壺部外



第30図 4号墳石室測量図(1)



第31図 4号填石室測量図(2)

面と脚部に凹線が施される。68は低脚。脚端部は上方に肥厚する。

短頸壺(69)

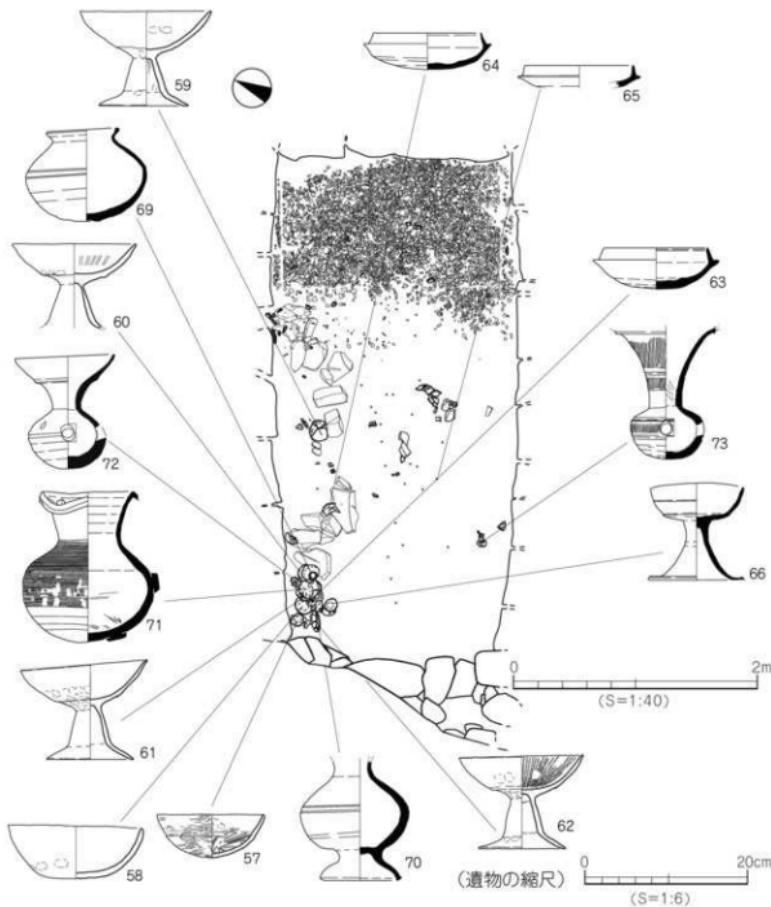
69は丸底の底部。口縁部は外上方に開く。端部は内側に肥厚し丸く仕上げる。

長頸壺(70)

玄室北西隅で出土した。口頭部は欠失。体部中位に2条の凹線が施される。脚端部は内側で接地する。

広口壺(71)

玄室北西隅で出土した。体部は扁球形で丸底気味の底部。外面に土器の融着が見られる。



第32図 4号墳石室内出土遺物測量図(土製品)

鉢 (72・73)

72は内湾して立ち上がる口縁部。肩部に凹線が巡り、凹線上から円孔が穿たれる。73は頸部に継ぎのヘラ描き沈線文、体部に刺突文が施される。

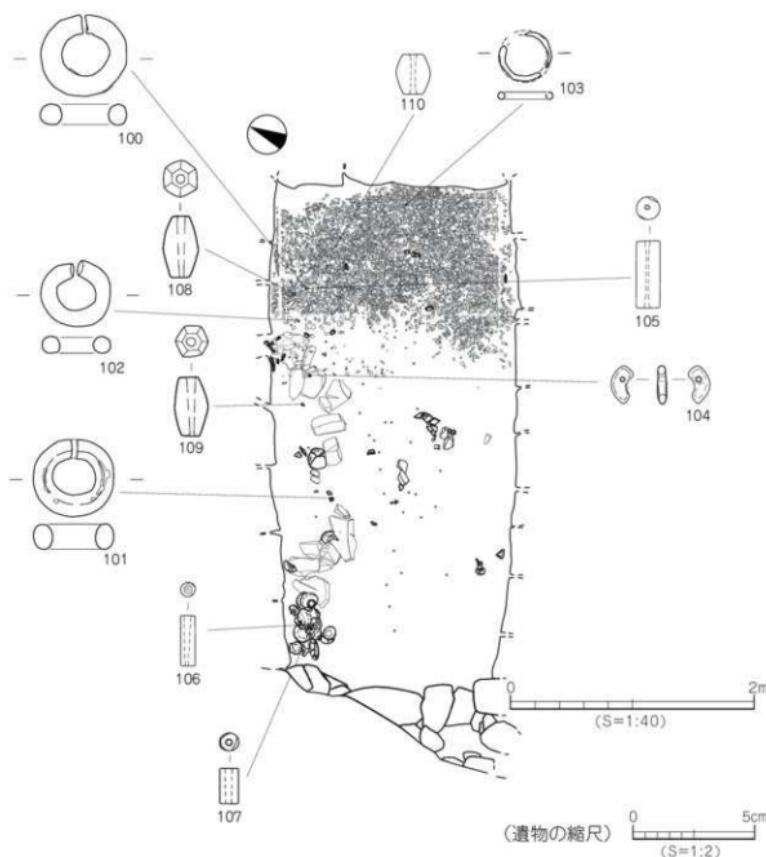
鉄製品 (第35~37図)

大刀 (74・75)

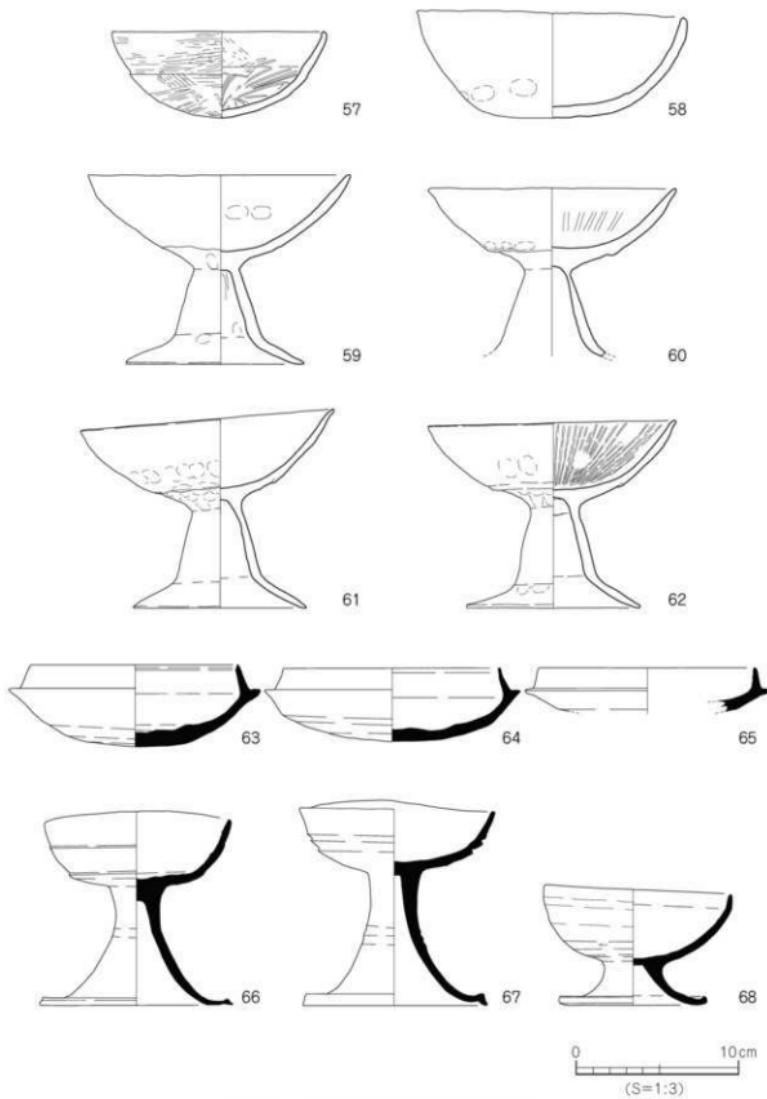
74・75は玄室奥の出土で同一のものと思われる。74は刀部、75は刀部と茎部片である。

鉄鎌 (76~92)

76~86は平根の主頭鎌。87・88は細根の長頭鎌である。



第33図 4号墳石室内出土遺物測量図(装飾品)



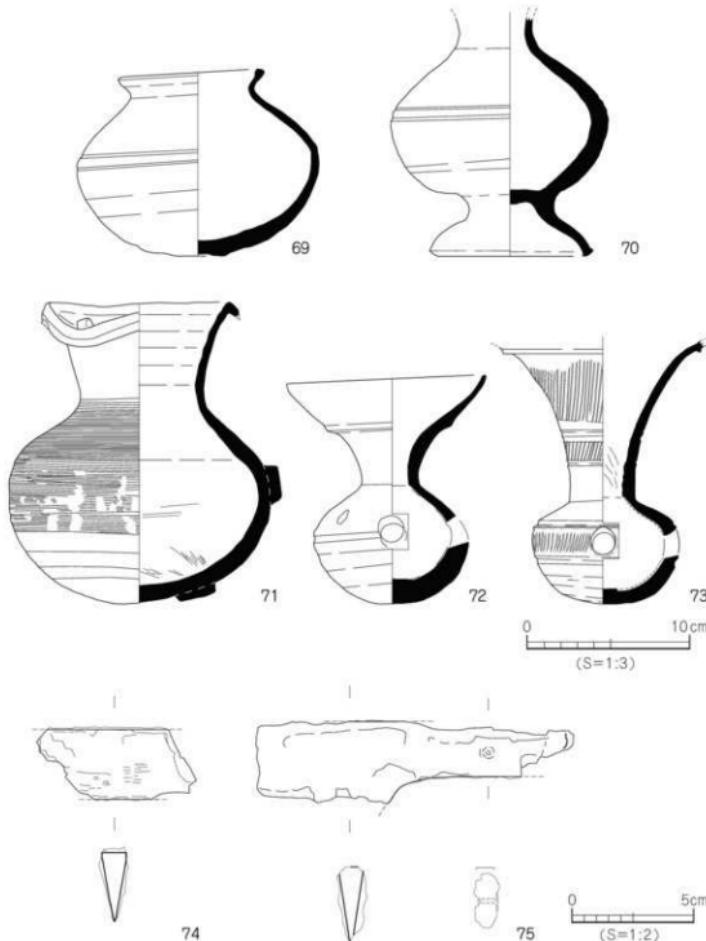
第34図 4号墳石室内出土遺物実測図(1)

刀子（93・94）

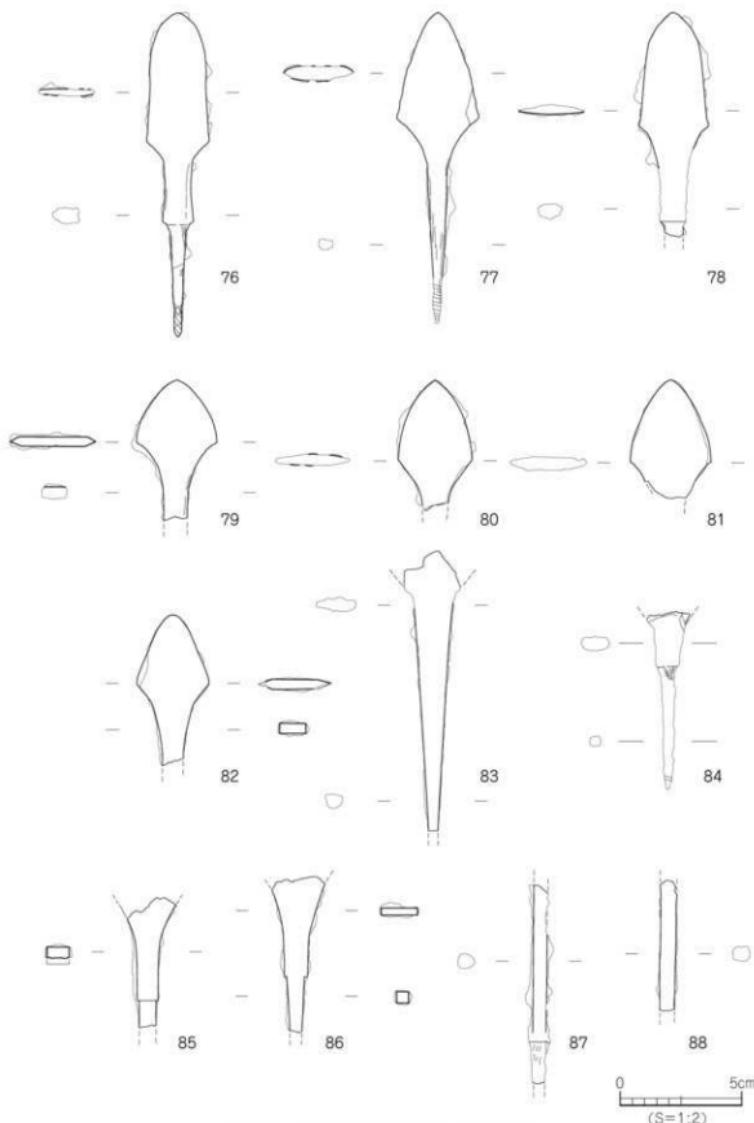
玄室北側での出土である。刀部から柄部にかけての破片で93は現存長8.3cmを測る。柄部に木質が残る。94は現存長4.6cmを測る。

馬具（95～99）

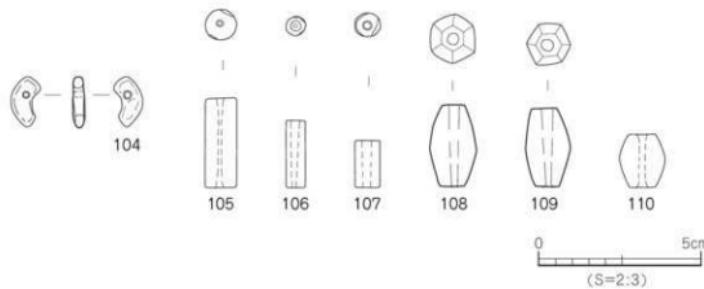
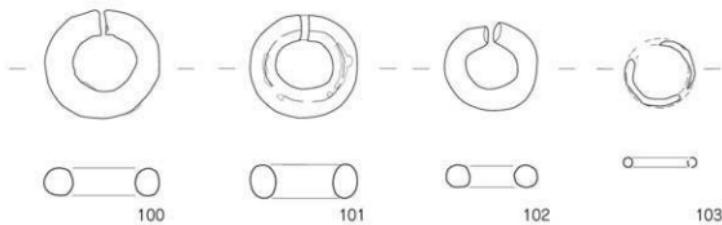
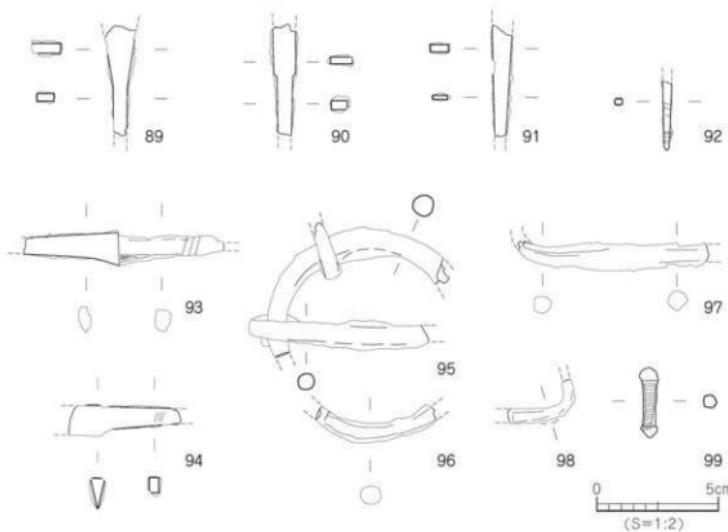
玄室北西部での出土である。95～98は轡。95・96は鏡板片。97は引手片。98は吊舌金具。99は



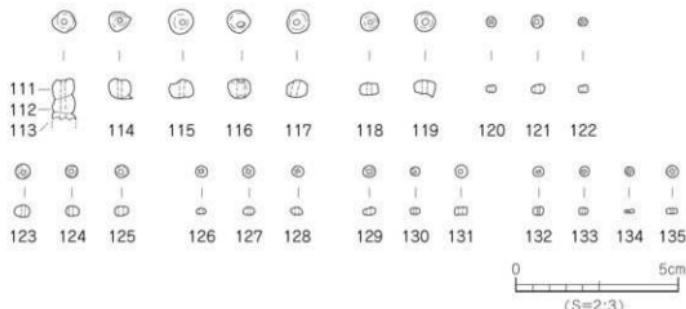
第35図 4号埴石室内出土遺物実測図(2)



第36図 4号墳石室内出土遺物実測図(3)



第37図 4号墳石室内出土遺物実測図(4)



第38図 4号墳石室内出土遺物実測図(5)

弭である。完存品。

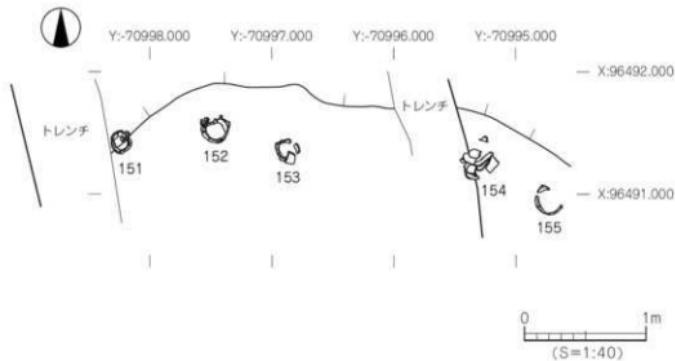
装飾品(第37・38図)

耳環(100~103)

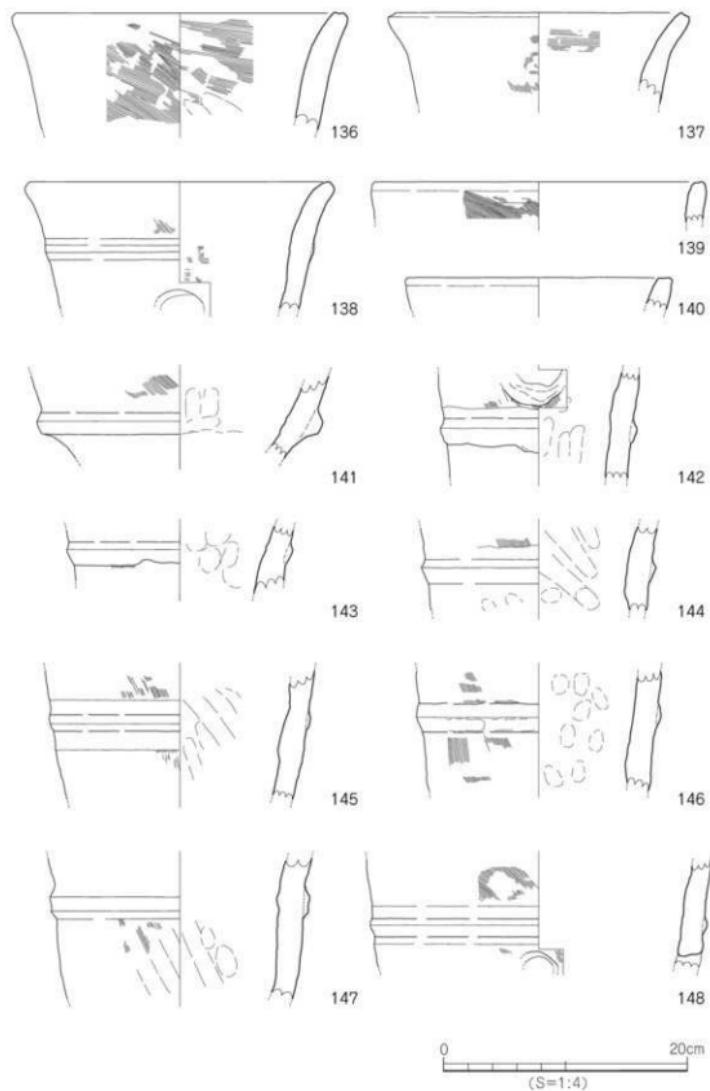
100は玄室奥で出土した大型の耳環である。中実の銅芯金張製で長さ3.3cm、幅3.55cm、重さ32.904 gを測り重たい。101は玄室中央部の北側で出土した。銅芯金張製で重さ7.189 gを測る。102は玄室奥の北側で出土した。表面層は無い。重さ16.974 gを測る。103は玄室奥の中央部で出土した。遺存状態が悪く重さ0.524 gを測る。

玉類(104~135)

104は勾玉。玄室中央部の北側で出土した。滑石製で完形品である。105~107は管玉。105・106は碧玉製。107は瑪瑙製である。108・109は切子玉。110は埋もれ木製の棗玉である。111~117は土玉。118~135はガラス小玉である。色調は濃青色、濃緑色、緑青色、青色、緑色である。直径は最大のもので6mm、最小で2.7mmを測る。



第39図 4号墳埴輪測量図

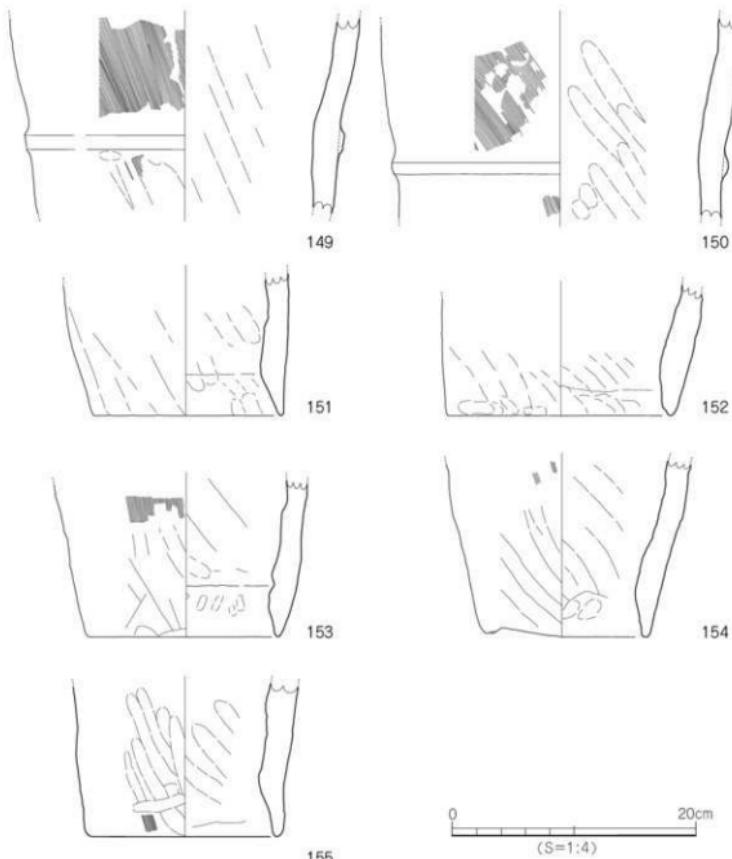


第40図 4号墳出土埴輪実測図(1)

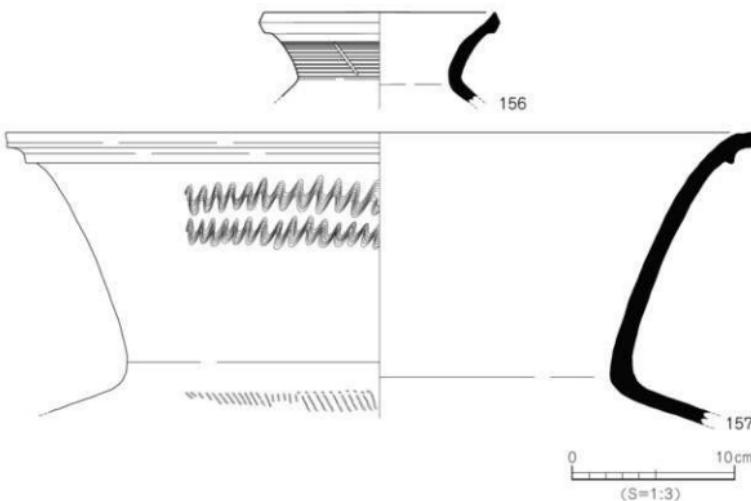
(8) 塗輪の検出状況(第39図)

埴丘上では、石室中央部から北側5mで石室を開むように5基の塗輪列を検出している。いずれも円筒埴輪で上部が削平され基底部の1段を残すのみである。塗輪の間隔は60~80cmを測る。円筒埴輪が配置された外側の地形は地山整形のため傾斜を強くして落ち込んだら平坦面を形成する。平坦面までの距離は、石室中央から7mを測る。このほか、石室埋土中から塗輪片が大量に出土している。

(9) 出土塗輪(第40・41図)



第41図 4号埴出土塗輪実測図(2)

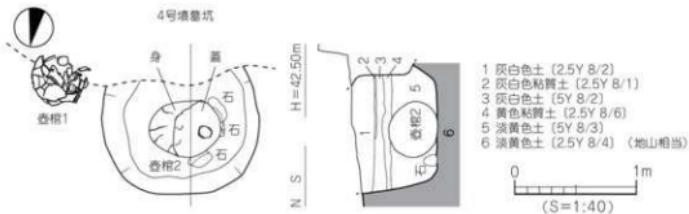


第42図 4号填北側裾部表探物実測図

136～140は円筒埴輪の口縁部である。復元口径は21～26cmで、直線的に外傾する136に対し、137は屈曲して外反する特徴を有する。口縁端部外面および端面はナデにより溝みがみられる。外面には10本/cmの細かな斜め方向のハケが施され、136・137には端部内面に横方向のハケが残る。138は口縁部長が約6cmと短い点で他個体とやや形状が異なり、体部には円形スカシ孔が穿たれている。

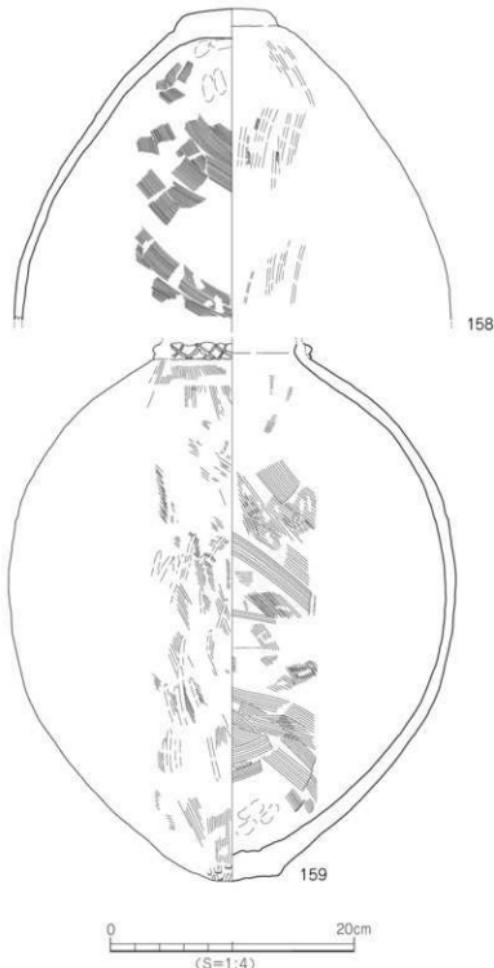
141は朝顔形埴輪の頭部と口縁部の接合部付近である。口縁部を頭部上面と接合させた後、外面接合痕を隠すように断面台形の突帯を貼付する。内面には粘土接合痕が残る。

142～150は円筒もしくは朝顔形埴輪の突帯を含む体部である。142・143は胴径がやや細身の個体で、突帯は断面三角形状である。142・148には円形スカシ孔を穿つ。突帯断面は三角形状（143～146・148・150）と低い台形（147・149）に大別されるが、器面調整のナナメハケは10本程度/cmと細かい点で共通する。なお、145・147・149は突帯下部に板オサエが部分的に確認できることから、基底部付近であると推測される。



第43図 叠棺 1・2 測量図

151～155は基底部である。底径13～18cmとばらつきがあるが、調整による歪みがその原因である。外面には①斜め方向の板オサエの後、②基底端部付近に縦方向の板オサエ痕が連続して認められる。また②段階で連動して内面に指オサエ痕が強く残るため、結果的に端部が尖り、端面は大きく波打つ。なお、154の上端には突帯らしき痕跡がみられるため、基底部高は15cm前後と推定される。



第44図 壺棺1実測図

(10) その他の出土遺物 (第42図)

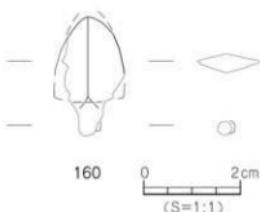
156・157は墳丘北側の埴輪列近くで出土した須恵器甕である。156の口縁部外面にヘラ記号と思われる「ノ」字状の沈線が看取される。157は大型品。口縁端部外面直下に突帯が巡り、波状文が2条施されている。

第3節 その他の遺構と遺物

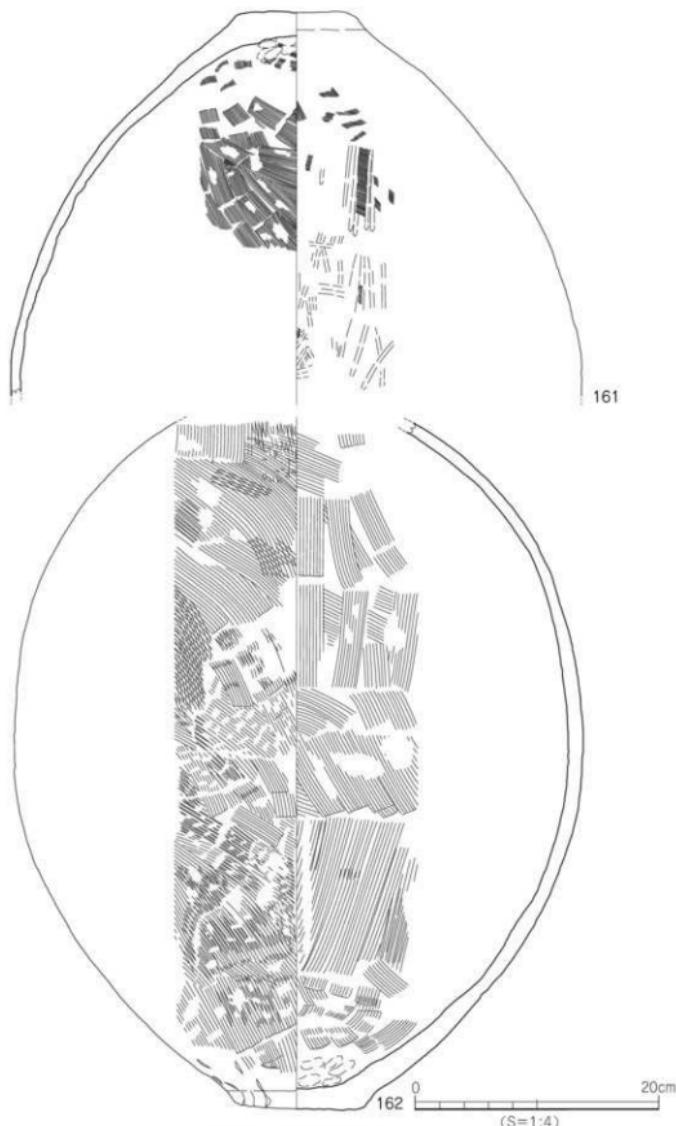
(1) 壺棺(第43～46図)

壺棺1

壺棺1は、4号墳石室の奥壁北側の墓坑掘削時に検出した。棺身と棺蓋で構成されるが、4号墳石室の墓坑に切られるため南側が一部破損し割れていた。土坑の掘り方は、土坑埋土と地山の見分けがつかなく確認できなかった。遺物(副



第45図 壺棺1出土遺物実測図



第46図 壺棺2実測図

葬品)は棺底より銅鏡が1点出土している。人骨などは検出していない。

壺棺2

壺棺2は、4号墳石室北側で黒色土を取り除いた後の地山面で検出した。壺棺1との距離は約1.0mを測る。土坑を伴い棺身・棺蓋で構成される。土坑埋土色は地山と遜色ないほどよく似ている。棺身は頭部以上を打ち欠いた大形の壺を使用し、棺蓋には胴部上半を打ち欠いた大形の壺を使用する。土坑の平面形は円形を呈する。南側の一部は4号墳の墓坑に切られる。検出規模は直径1.0m、深さ0.7mを測る。棺身は、蓋をしたのち西に約40度の傾斜をもって土坑中央部に設置される。棺身の西側では、棺身と土坑とのすき間に自然石4個を配して棺身を固定する。遺物(副葬品)もなく人骨も検出しなかった。

(2) 土坑(第47~49図)

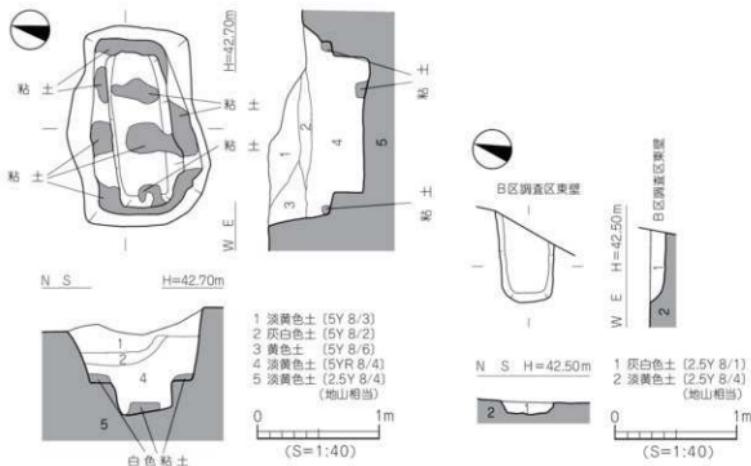
土坑は5基を検出している。すべて4号墳石室南側の黒色土を取り除いた地山面での検出である。

SK1

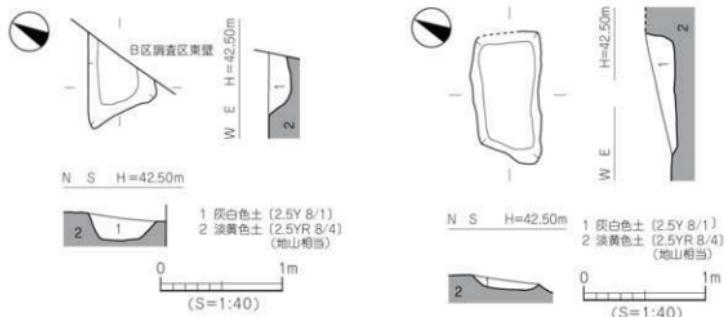
SK1は4号墳石室から南へ約2.0mに位置する東西方向の土坑である。平面形は隅丸長方形を呈する。土坑は、検出面から45cm下方に幅10cm前後の平坦面をつくる段掘り構造となる。その平坦部や土坑底部には灰白色の粘土が厚さ1~10cmで貼り付く。検出規模は長さ1.65m、幅1.0~1.1m、深さ0.80mを測る。人骨や木質なども検出せず土器類もまったく出土していない。

SK2

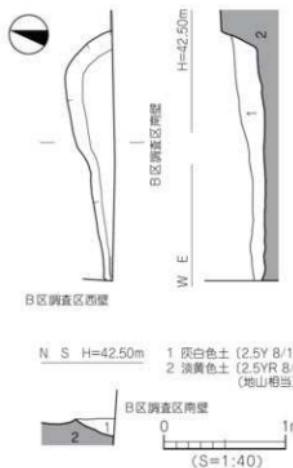
SK2は、SK1の南側で検出した東西方向の土坑である。東側は調査区外となり全容は不明である。検出規模は東西0.70m、南北0.42m、深さ0.12mを測る。埋土は灰白色土の1層である。遺物は出土してい



第47図 SK1・2測量図



第48図 SK3・4測量図



第49図 SK5測量図

ない。

SK3

SK3は、SK2の南側で検出した東西方向の土坑である。東側がトレチ外となり全容は不明である。検出規模は東西0.80m、南北0.53m、深さ0.20mを測る。埋土は灰白色土の1層である。遺物は出土していない。

SK4

SK4は、SK3の西側約1.0mで検出した東西方向の土坑である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は東西1.1m、南北0.54m、深さ0.20mを測る。埋土は灰白色土の1層である。遺物はまったく出土していない。

SK5

SK5は、SK4の南側で検出した東西方向の土坑である。南側は調査区外となり全容は不明である。検出規模は東西2.0m、南北0.40m、深さ0.30mを測る。埋土は灰白色土の1層である。遺物は出土していない。

v.v.

清物網客考

遺物觀察表 — 凡例 —

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 ()：推定復元值

調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、肩→肩部、

腮→腮部、腮上→腮部上位、腮下→腮部下位、脚→脚部、底→底部。

胎土柵 胎土柵では混和割を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、褐→褐色粒、黒→黑色粒、白→白色粒。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~3) → 「1~3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について。○→良好、○→良。

表1 3号堆A主体部出土遗物观察表 土制品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色譜 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版	
				外 面	内 面					
1	壺蓋	口径 器高	145 50	天井部は扁平。天井部と口縁部の境には不明瞭となる。口縁端部は内に段をもつ。	⑩回転ヘラケツリ 回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~4) ○		16	
2	身环	口径 器高	125 53	ちあきがりは内にする。端部は丸い。受部は短く上方にのびる。底部はやや平底。	⑩回転ヘラケツリ 回転ナデ	灰色 灰色	密 石・長(1~5) ○		16	
3	無蓋 高环	口径 底径 器高	114 90 150	端部は口縁部と体部の境に段をもつ。体部に刺突文が施される。脚部は三方向にスカラが施される。	回転ナデ ⑩回転ヘラケツリ	灰色 灰色	密 長(1~4) ○	自然釉	16	
4	無蓋 高环	口径 底径 器高	104 90 138	端部は口縁部と体部の境に段をもつ。体部に刺突文が施される。脚部は三方向にスカラが施される。	回転ナデ ⑩回転ヘラケツリ	灰色 灰色	密 長(1~2) ○	自然釉	16	
5	無蓋 高环	口径 底径 器高	102 70 135	端部は口縁部と体部の境に段をもつ。体部に波状文が施される。脚部には盤状の勝・古輪が施される。	回転ナデ ⑩回転ヘラケツリ	青灰色 灰色	密 長(1~2) ○	自然釉	16	
6	長頭頸	口径 底径 器高	51 62 89	平底の底部、扁圓形の体部から肩部はなだらかに立ち上がる。頭部は外上方に立ち上がり口縁端部は丸い。	回転ナデ ⑩ナデ・相オサユ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	16	
7	蓋	ツマムヒ 器高	28 110 54	天井部はやや扁平。種々丸味をもつ。口縁端部は丸くおさめる。	⑩ナデ カキ目	回転ナデ 回転ナデ	黄灰色 灰白色	長(1~3) ○	自然釉	17
8	脚付 有蓋壺	口径 底径 器高	89 110 261	口縁部は内に段をもつ。頭部は波状文。肩部に刺突文を施す。脚部には三方向のスカラが施される。	回転ナデ ⑩ナデ(工具直) カキ目	回転ナデ (工具直) 回転ナデ	灰黃・黒褐色 黄灰色	密 長(1~6) ○	17	
9	脚付 有蓋壺	口径 残高	99 220	頭部外面に二段の波状文を施す。やや肩の張る体部。底部外面に脚部との接合痕跡を残す。	回転ナデ カキ目 カキヨリ→タタキ	回転ナデ (指標直) タタキ	灰白・暗灰色 灰白色	密 ○	17	
10	広口壺	口径 器高	145 227	口縁部は外反して立ち上がる。口縁部は肥厚して丸くおさめる。底部は丸い。	回転ナデ カキ目 カキヨリ	回転ナデ (工具直) 回転ナデ	灰 長(1~2) ○		17	
11	魁	口径 器高	132 150	ツババ状に開く口縁部。端部は丸い。底部に刺突文が施され、文様上から円孔が施される。	回転ナデ ⑩回転ヘラケツリ	灰白色 灰色	密 長(1~4) ○	自然釉	17	
12	提瓶	口径 器高	56 155	扁平な体部に口部を付す。把手は退化し輪状とはならずカギ形の突起となる。	回転ナデ カキ目	回転ナデ 回転ナデ	灰黃・黑色 灰白色	密 長(1~2) ○	自然釉	16

表2 3号墳A主体部出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	団版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
13	大刀	ほぼ完形	鉄	全長(94.00) 刃長(77.00)	(3.70)	(1.10)	1361.930	17
14	大刀	刀片	鉄	(4.10)	(2.90)	(0.75)	16.482	
15	大刀	刀片	鉄	(7.80)	(3.20)	(1.10)	37.738	
16	鐵	身部	鉄	(7.80)	(2.80)	5.70	11.043	主頭形 17
17	鐵	茎端部 刃先端部欠損	鉄	(11.40)	3.05	0.40	7.901	主頭形
18	鐵	身部片	鉄	(3.50)	(2.40)	(0.40)	4.061	主頭形
19	鐵	茎部欠損	鉄	(12.00)	(1.20)	(0.50)	18~20 合わせて15.500	17
20	鐵	鐵身~頭部一部欠損 茎部端部欠損	鉄	(8.20)	(1.00)	(0.50)	18~20 合わせて15.500	17
21	鐵	茎部片	鉄	(1.80)	(0.40)	(0.20)	18~20 合わせて15.500	17
22	鐵	茎部端欠損	鉄	(14.20)	1.00	8.30	13.455	片刃形 17
23	鐵	鐵身~頭部 一部欠損	鉄	(9.70)	(1.00)	(0.60)	6.430	17
24	鐵	頭部~茎部 一部残存	鉄	(7.90)	(0.80)	(0.60)	5.092	17
25	鐵	鐵身~頭部 一部残存	鉄	(7.50)	(1.00)	(0.60)	6.376	17
26	鐵	頭身部~頭部 一部欠損	鉄	(6.60)	(0.90)	(0.50)	3.711	
27	鐵	頭部~茎部 一部欠損	鉄	(6.00)	(0.90)	(0.70)	4.073	17
28	鐵	鐵身部~頭部 一部欠損	鉄	(4.80)	(0.90)	(0.40)	1.663	
29	鐵	頭部~茎部 端部欠損	鉄	(6.20)	(1.00)	(1.00)	5.714	
30	鐵	頭部~茎部 一部欠損	鉄	(7.00)	(0.90)	(0.80)	5.407	17
31	鐵	茎部	鉄	(3.90)	11.00	0.70	3.456	
32	刀子	刃部・茎部 端部欠損	鉄	(12.30)	(2.15)	(1.15)	18.306	柄部に木質残る 17
33	刀子	刃部一部欠損	鉄 柄は鹿角	(11.00)	(2.20)	3.60	31.082	刃部に木質残る 17
34	鞍金具	鐵身片	鉄	(2.00)	(0.90)	(0.30)	0.864	
35	轡	引手・衝・鎖	鉄	15.40	11.50	0.60	203.180	18
36	兵庫鎖	三連	鉄	(3.55)	1.55	0.30	10.389	18
37	兵庫鎖	三連	鉄	(3.40)	1.70	0.40	12.309	18
38	兵庫鎖	三連	鉄	(1.80)	1.60	0.30	7.147	18

遺物観察表

表3 3号墳B主体部出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
39	大刀	刀部	鉄	(18.10)	(3.60)	(1.50)	181.216		18

表4 3号墳B主体部出土遺物観察表 裝身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				廣(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
40	耳環 (銀鋳板張)	両端部欠損	銀銅	(2.05)	2.25	0.80	8.384	中実	18

表5 3号墳周溝出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
41	高坏	口徑 4.0	口縁部。口縁部は外上方に開く。端部 は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	橙 橙	長(1~2) 規 ○		
42	高坏	底径 9.5	脚部。脚柱は上方にのびる。脚盤は 板やかに曲げて延く開く。	マメツ	マメツ	橙 橙	長(1~2) 規 ○		18
43	坏蓋	口径 5.0	天井部は丸みをもつ。天井部と口縁 部の境は不明瞭となる。	⑤回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 石・長(1~3) ○		18
44	無蓋 高坏	口径 底径 器高 13.0 11.7 15.7	口縁部と体部の境に段をもつ。体部 は無支。脚柱は2条の凹縫。スカシ は施されない。	回転ナデ ⑥回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 石・長(1~3) ○	自然軸	18
45	蓋	口径 器高 100 36	丸味をおびる天井部。天井部と口縁 部を分ける棱は消失。口縁端部は丸 く仕上げる。	⑦回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 石・長(1~2) ○		18
46	蓋	口径 器高 10.5 4.1	扁平な天井部。天井部と口縁部を 分ける棱は消失。天井部外面上に「×」 のへら記号が施される。	⑧回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 石・長(1~2) ○		18
47	短頭劍	口径 底径 器高 7.3 8.6 15.0	扁平な底部。体部最大径を中位に もつ。口縁部と体部間に刻目突帯。肩 部と体部中央に刺突文を施す。	回転ナデ ⑨工具痕 ⑩回転ヘラケズリ ⑪指ナデ	回転ナデ ⑫指ナデ	暗黃灰色 黄灰・黒褐色	密 長(1~3) ○	自然軸	19
48	短頭劍	口径 器高 7.6 9.3	矧く上方にのびる口縁部。端部は丸 く仕上げる。体部上半に最大径をも つ肩が張る。底部は平底。	回転ナデ ⑬回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 長(1~3) ○		18
49	壺	残高 14.4	底部と口縁部は欠失。体部は丸く肩 の張りも弱い。	回転ナデ ⑭カギ目 ⑮回転ヘラケズリ	回転ナデ ⑯工具によるナデ	灰白色 灰白色	密 長(1~4) ○		
50	提瓶	残高 16.5	口縁部は欠失。扁平な体部。把手は カギ状の突起となる。	カギ目	回転ナデ	灰黄・黒色 灰色	密 長(1~4) ○	自然軸	19
51	提瓶	残高 18.1	口縁部と把手は欠失。扁平な体部。 ナデ →カギ目 →回転ナデ	カギ目 ⑭回転ナデ (指頭痕)	回転ナデ (指頭痕)	灰白色 灰色	密 長(1~2) ○		
52	壺	口径 残高 23.1 9.0	頂部は直立気味に立ち上がり、口縁 部は大きく外反し水平にのびる。口縁 部外側に波状文が施される。	ナデ →カギ目 →ハケサ-6本(cm) →ミガキ ナデ	①-⑩ミガキ ⑪ハケサ-6本(cm) ⑫ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~3) 金 ○		19

船ヶ谷遺跡 5次調査

表 6 3号墳周溝出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
53	石鏡	ほぼ完形 先端一部欠損	サヌカイト	(250)	120	0.27	0.893	19
54	石鏡	完形	サヌカイト	240	140	0.27	0.905	19
55	石斧	欠損	緑色片岩	4.60	200	0.70	11.520	19
56	石包丁	欠損	緑色片岩	13.20	5.30	1.00	115.590	19

表 7 4号墳石室内出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
57	环	口径 豊高 53	丸底の底部から内削して外方に立ち上る口縁部。端部は丸く仕上げる。体部外面に段をもつ。	ミガキ	◎ハケ→ミガキ ハケ→暗文(5~ 2mm幅)(工具痕)	赤・赤褐色 赤・赤褐色	密 ○		19
58	环	口径 底径 豊高 64	やや平底の底部から内削して立ち上る口縁部。端部は丸く仕上げる。	◎ヨコナデ マメフ(指頭痕)	◎ヨコナデ マメフ(指頭痕)	根・黄褐色 根・黄褐色	石・長(1~8) ○		19
59	高环	口径 底径 豊高 116	内削して上方に立ち上がる口縁部。端部は丸く仕上げる。脚部は屈曲して外方に開く。	◎ヨコナデ(マメフ) ナデ(マメフ) (指頭痕)	ナデ(マメフ) (指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~3) ○		20
60	高环	口径 残高 103	内削して上方に立ち上がる口縁部。端部は丸く仕上げる。脚部は欠失。	ナデ(指頭痕) マメフ	◎ナデ ミガキ	根・黄褐色 浅黄色・黄褐色	石・長(1~4) ○		20
61	高环	口径 底径 豊高 122	内削して外方に立ち上がる口縁部。端部は丸く仕上げる。脚部は屈曲して外方に開く。	◎ヨコナデ ◎ナデ(指頭痕) ◎ナデ(マメフ)	◎マメフ・ハクリ ◎ナデ(指頭痕) ◎ナデ(マメフ)	浅黄褐色 明赤褐色	石・長(1~2) ○		20
62	高环	口径 底径 豊高 115	内削して外方に立ち上がる口縁部。端部は丸く仕上げる。脚部は屈曲して外方に開く。	◎ヨコナデ ナデ(指頭痕)	◎ナデ→ミガキ ◎マメフ・ハクリ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) ○		20
63	环身	口径 豊高 51	たちあがりは内削し、端部は面をもつ。受部は近く水平にのびる。底部は平たい。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ (工具痕)	回転ナデ ◎ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ○		20
64	环身	口径 豊高 45	たちあがりは内削し、端部は丸く仕上げる。受部は近く水平にのびる。底部は平たい。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ	回転ナデ ◎ナデ	灰色 灰色	密 長(1~3) ○		20
65	环身	口径 残高 27	たちあがりは直立丸味の上方にのびる。端部は丸く仕上げる。受部は近く水平にのびる。底部は丸味。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ	回転ナデ ◎ナデ	淡黄色 淡黄色	密 長(1~2) ○		
66	無蓋 高环	口径 底径 豊高 112	内削して外方に開く口縁部。端部は丸く仕上げる。脚部は水平に近くのひき。体部外側と脚部に凹線。	◎回転ヘラケズリ ◎回転ナデ	回転ナデ ◎ナデ	黒・黒白・灰色 黒・灰色	長(1~4) ○		21
67	無蓋 高环	口径 底径 豊高 (114) 126	内削して外方に開く口縁部。端部は丸く仕上げる。脚部は水平に近くのひき。体部外側と脚部に凹線。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ	回転ナデ ◎ナデ	灰・灰白・淡黃 灰・灰白・淡黃	石・長(1~2) ○		21
68	無蓋 高环	口径 底径 豊高 91 74	底部から内削して上方に立ち上がる口縁部。脚は低脚で底端部は上方に肥厚する。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ	回転ナデ ◎ナデ	灰色 灰色	白 ○		20
69	短頭壺 器高	口径 底径 豊高 82 112	丸底の底部。体部最大径を中位にもつ。口縁部は頗る外方に開き端部は内側に肥厚し、丸く仕上げる。	◎回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰色	密 長(1~4) ○		20
70	脚付 底径 長頭壺 残高	口径 底径 90 147	口縁部は欠失。体部最大径を中位にもつ。体部中位には2条の凹線が施される。脚部は内側で接続する。	回転ナデ ◎回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白・灰色 灰白色	長(1~4) ○	自然釉	21
71	広口壺 器高	口径 高185	口縁部は外方にのびる。口縁部は頗る強張りで丸底気味の底部。外面に擦痕が見られる。	◎回転ナデ ◎カキ目 ◎ヘラケズリ	回転ナデ ◎カキ目によるナデ ◎ヘラケズリ	オーバーカルシ化色 オーバーカルシ化色	長(1~4) ○	自然釉	21

遺物観察表

4号墳石室内出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
72	埴	口括 残高	(12.1) 内面気味に開く口縁部、面部上と耳部の外面部に凹をもつ。背面に凹部が並ぶ。西側上から円孔が穿たれる。	回転ナデ ⑩暈ヘラケズリ	回転ナデ ⑩暈ヘラケズリ	灰灰オリーブ灰地 灰灰オリーブ灰地	長(1~2) 幅 ○	自然釉	21
73	埴	残高	15.2 口縁部欠失。頭部に複数の凹ラ横き沈窓文を上下2段に施し、体部中位には刺突文を施す。	回転ナデ ⑩暈ヘラケズリ	回転ナデ ⑩工具によるナデ	オリーブ黒色 オリーブ黒色	密 長(1~3) ○	自然釉	21

表8 4号墳石室内出土遺物観察表 鉄製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
74	大刀	刀身部	鉄	(560)	3.00	1.10	30443		22
75	大刀	刀身・茎部ともに 欠損	鉄	(1300)	3.30	1.10	81679		22
76	劍	完形	鉄	13.20	2.60	0.70	20692		22
77	劍	完形	鉄	12.65	3.30	0.60	29025		22
78	劍	鍔身部	鉄	(9.15)	2.80	0.60	18125		22
79	劍	鍔身部	鉄	(5.70)	3.50	0.60	17.711		22
80	劍	鍔身部	鉄	(5.30)	3.20	0.50	12.823		22
81	劍	鍔身部	鉄	(4.85)	3.15	0.55	13.327		
82	劍	鍔身部 一部欠損	鉄	(6.20)	(2.80)	0.70	13.530		
83	劍	茎部	鉄	(16.40)	2.30	0.60	19.891		22
84	劍	茎部欠損	鉄	(7.30)	1.70	0.60	6.646		22
85	劍	茎部欠損	鉄	(5.30)	1.70	0.55	8.802		22
86	劍	頭部～茎部 一部欠損	鉄	(6.40)	2.10	0.90	11.534		22
87	劍	茎部欠損	鉄	(8.10)	1.00	0.54	8.190		22
88	劍	範被片	鉄	(5.30)	0.90	0.60	5.620		22
89	劍	茎部欠損	鉄	(4.50)	1.20	0.63	5.548		
90	劍	頭部～茎部 一部欠損	鉄	(4.60)	1.10	0.70	4.657		22
91	劍	茎部欠損	鉄	(4.50)	0.90	0.53	3.094		22
92	劍	茎部端	鉄	(2.75)	0.40	0.30	0.608		22
93	刀子	刃部・茎部ともに 端部欠損	鉄	(8.30)	1.40	0.58	9.536		22
94	刀子	茎部片	鉄	(4.60)	1.30	0.60	6.050		22
95	譽	鏡板欠損	鉄	(7.30)	5.10	1.20	49.174		22

4号墳石室内出土遺物観察表 鉄製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
96	轡	鏡板	銅	(5.00)	0.90	0.90	6.781		22
97	轡	引手片	銅	(7.80)	1.10	1.20	16.512		22
98	轡	舌金具	銅	(2.90)	0.60	0.60	2.268		22
99	剪	完形	銅	2.85	0.70	0.70	2.190		22

表 9 4号墳石室内出土遺物観察表 裝身具(耳環)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
100	耳環 (銅芯金張製)	完形	銅	3.30	3.55	0.85	32.904		23
101	耳環 (銅芯金張製)	完形	銅	3.10	3.30	1.05	7.189		23
102	耳環	完形(表面層なし)	銅	(2.70)	(2.85)	(0.70)	16.974		23
103	耳環	芯部1/2 芯部1/2	銅	(2.00) (1.70)	(0.25) (0.20)	(0.20) (0.18)	0.352 0.172		23

表 10 4号墳石室内出土遺物観察表 裝身具(勾玉)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
104	勾玉	完形	滑石	1.55	0.90	0.40	0.644		23

表 11 4号墳石室内出土遺物観察表 裝身具(玉類)

(1)

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					直徑(cm)	孔徑(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
105	管玉	完形	碧玉	暗緑灰褐色	0.96	0.25	2.75	4.859		23
106	管玉	完形	碧玉	オリーブ灰褐色	0.60	0.30	2.05	1.284		23
107	管玉	完形	瑪瑙	赤褐色透明	0.76	0.30	1.48	1.517		23
108	切子玉	完形	水晶	透明	1.40	0.30	2.50	6.654		23
109	切子玉	完形	水晶	透明	1.40	0.40	2.40	5.152		23
110	纏玉	完形	埋もれ木	黒灰色	1.40	0.27	1.60	1.582		23
111	土玉	完形	土	黒褐色	0.75	0.20	0.60	III ~ 113合計 0.685		23
112	土玉	完形	土	黒褐色	0.75	0.20	0.60	III ~ 113合計 0.685		23
113	土玉	一部欠損	土	黒褐色	0.75	0.20	0.20	III ~ 113合計 0.685		23
114	土玉	一部欠損	土	黒褐色	0.65	0.25	0.60	0.229		23
115	土玉	完形	土	黒褐色	0.80	0.15	0.50	0.322		23
116	土玉	完形	土	暗青灰褐色	0.68	0.24	0.57	0.249		23
117	土玉	完形	土	暗青灰褐色	0.70	0.21	0.57	0.323		23

遺物観察表

4号墳石室内出土遺物観察表 装身具(玉類)

(2)

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					直徑(cm)	孔徑(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
118	ガラス小玉	完形	ガラス	濃青色	0.60	0.15	0.35	0.186		23
119	ガラス小玉	完形	ガラス	濃青紫色	0.60	0.20	0.50	0.295		23
120	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.31	0.15	0.20	0.027		23
121	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.39	0.15	0.30	0.055		23
122	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.28	0.10	0.26	0.029		23
123	ガラス小玉	完形	ガラス	緑色	0.42	0.10	0.34	0.083		23
124	ガラス小玉	完形	ガラス	緑色	0.39	0.16	0.28	0.053		23
125	ガラス小玉	完形	ガラス	青色	0.42	0.18	0.30	0.066		23
126	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.37	0.15	0.18	0.030		23
127	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.40	0.15	0.25	0.050		23
128	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.38	0.15	0.22	0.033		23
129	ガラス小玉	完形	ガラス	青色	0.39	0.10	0.22	0.035		23
130	ガラス小玉	完形	ガラス	青色	0.30	0.05	0.25	0.023		23
131	ガラス小玉	完形	ガラス	濃緑色	0.40	0.10	0.30	0.070		23
132	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.30	0.10	0.25	0.035		23
133	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.29	0.10	0.20	0.021		23
134	ガラス小玉	完形	ガラス	濃青色	0.27	0.10	0.12	0.010		23
135	ガラス小玉	完形	ガラス	緑青色	0.35	0.15	0.18	0.029		23

表12 4号墳出土遺物観察表 塗輪

(1)

番号	基種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
136	埴輪	口径 残高 (26.1) 9.6	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。	ナデ ハケ(8~9本/cm)	ナデ(指頭痕) ハケ(8~9本/cm)	浅黄褐色 褐色	石・長(1~5) ○		
137	埴輪	口径 残高 (23.4) 7.4	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。	マメツ ハケ(7~8本/cm)	マメツ ハケ(7~8本/cm)	褐色 褐色	石(1~3) ○		
138	埴輪	口径 残高 (24.6) 10.4	円筒埴輪の口縁部。口縁部は外反する。円孔有り。	ナデ ハケ(8本/cm)	マメツ ハケ(9~10本/cm)	黄褐色 褐色	石・長(1~3) ○		
139	埴輪	口径 残高 (26.6) 3.1	円筒埴輪の口縁部。	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	マメツ	褐色 褐色	石(1~3) ○		
140	埴輪	口径 残高 (21.5) 2.2	円筒埴輪の口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	長(1~4) 金 ○		
141	埴輪	残高 6.9	朝顔形埴輪。口縁の突帯部分。	ハケ(7~9本)/cm ナデ	ナデ(指頭痕)	褐色 褐色	石・長(1~4) 金 ○		
142	埴輪	残高 8.5	円筒埴輪の突帯部分。断面三角形の突帯でもつ。円孔有り。	ハケ(8~9本/cm) ◎指ナデ	ナデ(指頭痕)	褐色 褐色	石・長(1~3) ○		

4号墳出土遺物観察表 墓輪

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
143	埴輪	残高 5.6	円筒埴輪の突帯部分。断面三角形の突帯をもつ。	ヨコナデ ハケ(8~11本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~8) ◎		
144	埴輪	残高 6.7	円筒埴輪の突帯部分。断面三角形の突帯をもつ。	ハケ(8本/cm) ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	浅黄色 橙色	石・長(1~4) ◎		
145	埴輪	残高 10.5	円筒埴輪の突帯部分。断面三角形の低い突帯をもつ。	ハケ(8~10本/cm) ヨコナデ	ナデ(指頭痕)	橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) 金 ◎		
146	埴輪	残高 9.7	円筒埴輪の突帯部分。断面三角形の低い突帯をもつ。	ハケ(9~10本/cm) ヨコナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~5) 金 ◎		
147	埴輪	残高 11.5	円筒埴輪の突帯部分。断面台形の低い突帯をもつ。	ナデ ハケ(8本/cm)	ナデ(指頭痕)	明褐色 橙色	石・長(1~4) ◎		
148	埴輪	残高 8.8	円筒埴輪の突帯部分。断面三角形の低い突帯をもつ。円孔有り。	ハケ(9~10本/cm) ヨコナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~4) 金 ◎		
149	埴輪	残高 16.0	円筒埴輪の突帯部分。断面台形の低い突帯をもつ。	ハケ(10~11本/cm) ヨコナデ(指頭痕) タタキ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1~4) ◎		
150	埴輪	残高 15.8	円筒埴輪の突帯部分。断面台形の低い突帯をもつ。	ハケ(7~8本/cm) ナデ ハケ(8本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~5) ◎		
151	埴輪	底径 15.3 残高 11.6	基底部。端部は尖り気味。	(工具による)オサエ マメツ	ナデ(指頭痕)	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ◎	23	
152	埴輪	底径 18.3 残高 10.7	基底部。端部は尖り気味。	マメツ (工具による)オサエ (指頭痕)	マメツ 指ナデ 指オサエ	にぶい橙色 橙色	石・長(1~9) ◎	23	
153	埴輪	底径 15.5 残高 12.7	基底部。端部は尖り気味。	ハケ(10~11本/cm) (工具による)ナデ オサエ	(工具による)ナデ 指ナデ オサエ(指頭痕)	にぶい橙色 橙色	石・長(1~4) 金 ◎	23	
154	埴輪	底径 13.2 残高 14.4	基底部。端部は尖り気味。	ハケ(10本/cm) (工具による)ナデ	(工具による)ナデ (指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~5) 金 ◎	23	
155	埴輪	底径 (15.1) 残高 12.5	基底部。端部は尖り気味。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1~6) ◎	23	

表 13 4号墳出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
156	壺	口径 (14.1) 残高 5.5	口縁部は上下に拡張する。口縁部外 面に「ノ」字状のヘラ記号。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 長(1~2) ◎		
157	壺	口径 (46.0) 残高 17.9	大きく外反する口縁部。端部は面を もつ。端部直下の外縁に細い突帯が 盛り、上下2段の波状文が施される。	回転ナデ ヨコナデ 平行タタキ	ヨコナデ	にぶい黄橙-灰色 にぶい黄橙色	密 長(1~2) ◎	自然顔	

遺物観察表

表 14 塚棺 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版	
				外 面	内 面					
158	壺 (蓋)	底径 残高	67 26.6	突出する小さな平底の底部。胴部は 緩やかに内湾して立ち上がる。胴部 中位上半は打ち欠く。	ハケ(12本/cm) →ミガキ	ハケ(1~12本/cm) (指顎痕)	橙・黒褐色 褐色	石・長(1~4) ○	黒斑	24
159	壺 (身)	底径 残高	5.4 44.2	やや突出する不安定な平底の底部。 胴部は迷影を有する頭部に刻目突 き帶が施される。頭部以上は打ち欠く。	ハケ(5~6本/cm) →ミガキ(工具痕)	ナデ→ハケ (5~6本/cm) ⑩(工具による)ナデ ⑪(指顎痕)	明褐色 褐灰色	石・長(1~3) 金 ○	黒斑	24

表 15 塚棺 1 出土遺物観察表 銅製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
160	瓶	瓶身部 一部欠損	銅	2.4	(1.4)	0.35	0.969		24

表 16 塚棺 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版	
				外 面	内 面					
161	壺 (蓋)	底径 残高	10.0 31.5	やや突出する小さな平底の底部。胴 部は緩やかに内湾して立ち上がる。胴 部中位上半は打ち欠く。	ハケ(14本/cm) →ミガキ	ハケ(10本/cm) →ナデ(指顎痕)	褐色 明赤褐色	石・長(1~7) ○	黒斑	24
162	壺 (身)	底径 残高	9.8 56.3	突出する不安定な平底の底部。胴部 は長胴気味。頭部以上は打ち欠く。	ハケ(4本/cm) (工具痕)	ハケ(4本/cm) (指顎痕)	明黄褐色 明褐色	石・長(1~8) ○	黒斑	24

第VI章 考察

(1) 出土埴輪の観察

横穴式石室の中央部から北側約5mで、石室を囲むように60～80cmの間隔で樹立されていた。出土位置には基底部のみが残存し、完形品は皆無であるが、幸うじて石室内には崩落土と混じり埴輪片が流入していたため、ある程度の属性は確認可能である。また、埴輪の種類としては、円筒埴輪・朝顔形埴輪が認められるが、形象埴輪については現状では不明である。以下にその特徴を列記する。

1 円筒埴輪

①口縁部

口縁部は緩やかに外傾し、端部上面および端部外面にナデによる窪みが存在する。復元口径は25cm前後が予想され、一定の規格性を有するものと考える。また、138のように口縁部長6cm程度で短く外反する個体も存在しており、器高がやや短めの円筒埴輪が存在するようである。

②突帯（タガ）

突帯幅1.5cm前後で、断面形は低めの台形および「三角形状」を呈する。おそらく指ナデにより突帯下端が潰されてしまったためであろう。突帯高は5mm程度で非常に低い。（写真①）

③器面調整

ハケ目は大変細かく、10本前後/cmの左上がりのナナメハケが施される。また、136・137のように口縁部内面にヨコハケが認められる個体がある。（写真②）

なお、スカシ孔は小さめの円形で、器壁は最大で2cmを測り、かなり厚い印象を持つ。

④基底部

基底部径は13～18cmで、端部より高さ5cm付近で外面板オサエ（タタキ？）が顕著に残る。内面は外面調整と連動しながら指ナデ・指オサエが顕著である。（写真③・④）

なお、基底部端の断面形状は尖り気味で、最終的に倒立させたまま乾燥させるため、基底部端は平坦にならず波打っているのが特徴である。

2 朝顔形埴輪

確認できる破片としては、頭部と口縁部の接合部付近（141）がある。粘土接合部に断面台形の高めの突帯を貼付し、上下段にナデ調整を施している。なお内面の粘土接合痕は明瞭に残る。

(2) 墓輪からみた本古墳の年代的位置付け

本古墳出土埴輪の大まかな特徴をまとめると、①円筒埴輪と朝顔形埴輪が存在（形象埴輪は不明）、②全体的に器壁が厚く土師質焼成（焼成自体は良好）、③統一された基底部調整、を挙げができる。特に③については、器面観察から外面板オサエ・内面指オサエの複数工程が想定でき、端面が波打ったままであることから、製作の最終段階で倒立させて行う「基底部倒立調整・I工程」（山内2003a・2003b）が採用された可能性が高い。

以上の点から、本古墳の円筒埴輪は口縁内面の横ハケ調整など旧来の特徴を残しつつ、6世紀に松山平野で顕著な「基底部倒立調整」の採用や低平で断面「三角形状」突帯の存在などを勘案すると、「伊予IV-3期」（山内2008）に相当し、概ね6世紀中葉の年代観を与えることができよう。

また、これまで具体的に検討されてきた松山平野南部の「砥部窯跡群」を中心とした後期埴輪生産・



供給とは様相が異なることから、今後は近接する船ヶ谷向山古墳や鶴が峠古墳群、後期の影浦谷1号墳や永塚古墳など、松山平野北部の埴輪生産とその関係性を視野に入れる必要があろう。

【参考文献】

- ・山内英樹 2003a 「埴輪研究の現状と課題－「基底部調整」をめぐる諸問題について－」
『宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- ・山内英樹 2003b 「円筒埴輪製作工程における「基底部調整」」
『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会



①突堤断面（三角形状）



②口縁部内面のヨコハケ



③基底部調整（外面）



④基底部調整（内面）

第VII章　まとめ

今回の調査地は松山市埋蔵文化財包蔵地『No 17 東山町古墳群』内にあり周知の遺跡地帯である。調査では、古墳時代後期の古墳2基（船ヶ谷三ツ石3・4号墳）、明確な時期は不明ながら古墳築造以前の土坑2基（A区SK2、B区SK1）、弥生時代後期の壺棺（B区壺棺1・2）などの遺構のほか貴重な遺物を検出し、東山町古墳群の様相を明らかにするものになった。ここでは、上記の遺構について簡単に概観する。

（1）古墳

3号墳では、2基の主体部と周溝を検出した。片袖の横穴式石室をA主体部、床面だけの検出をB主体部として調査を行なった。A主体部では須恵器、大刀、鉄鎌、馬具などの副葬品が出土している。大刀は、床面から20cm上での検出とその出土状況に不自然さが残る。検出レベルでの埋葬面は確認できなかった。副葬品の特徴として、松山平野では類例の知れない須恵器の高坏（No.5）がある。そのほか、玉類などの装飾品が1点も出土していないことである。B主体部は、ほぼ壊滅状態であったものの石材の抜取り痕跡から耳環が1点や、大刀の破片が出土している。周溝からは、土師器の高坏や須恵器が出土している。このうち須恵器壺（No.47）も類例の知れない器形である。時期はA主体部玄室内や周溝出土須恵器がMT15～TK43並行期と考えられ、6世紀後半には埋葬が終わったものと考えられる。墳形については、周溝を含めて直径20m前後の円墳を想定している。

4号墳では、両袖の横穴式石室と埴輪列を検出した。副葬品には土師器、須恵器、大刀、鉄鎌、馬具、耳環や玉類などの装飾品が出土している。耳環は4個出土している。このうち1個（No.100）は重量が30gを超え、松山平野では最大級の耳環である。時期は玄室内から出土した須恵器がTK43～TK217並行期と考えられるほか、埴輪の年代観から6世紀中葉築造で7世紀前半には埋葬が終わったものと考えられる。墳形については、北側で検出した埴輪列を墳端として直径16m前後の円墳を想定している。

3号墳と4号墳では、石室形態や副葬品の種類に違いがあるほか、埴輪の使用、周溝の有無などの相違点が認められ、平野北部の後期古墳を知るうえで貴重な資料となる。

（2）土坑

A区のSK2とB区のSK1は、副葬品もなく人骨や木棺に使用された木質も検出していない。しかしながら平面形態や土層、粘土の出土状況からA区SK2は割竹形木棺が使用され、B区SK1は箱式木棺が使用されたと考えている。時期は、古墳築造以前と考えているが明確な時期比定はできていない。

（3）壺棺墓

松山平野では、弥生時代後期の壺棺は広く知られるものの、副葬品が出土する例は稀である。これまでに土製勾玉、管玉、石鎌などの出土例はあるが銅鏡の出土は初となる。

【参考文献】

- ・高尾・山之内 2002「船ヶ谷遺跡－4次調査－」（財）松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター
- ・山内英樹 2008「伊予の埴輪編年」「紀要愛媛」第8号 （財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- ・栗田茂敏 2008「鶴が峰遺跡II」（財）松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター

写真図版

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、 4×5 判や 6×7 判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、
 $35mm$ 判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カ メ ラ	トヨフィールド 45A	レ ン ズ	スーパーアンギュロン	90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67	55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール	28 ~ 85mm他
フ イ ル ム	白 黒 ネオパン SS・アクロス			

2. 製 版：写真図版 175 線

印 刷：オフセット印刷

用 紙：マットコート 110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~ 20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1.2

〔大西 朋子〕

〔作田 一耕〕



1. 上空より調査地を望む(南より)



2. 調査地周辺状況(北より)

図版
2



1. A区3号墳A主体部遺物出土状況(東より)



2. A区3号墳A主体部遺物

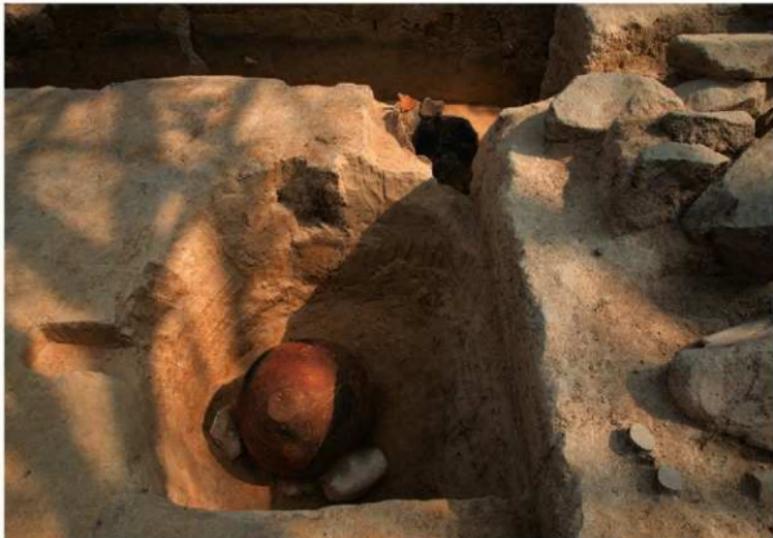


1. B区4号墳遺物出土状況(南東より)



2. B区4号墳出土遺物装飾品

図版
4



1. B区壺棺1・2出土状況(西より)



2. B区壺棺2

船ヶ谷遺跡 5 次調査



1. A区伐採作業風景
(北より)



2. A区伐採後の3号墳
(南より)



3. A区3号墳の墳丘測量
作業(東より)

図版
6



1. A区3号墳A主体部(西より)



1. A区3号墳A主体部
遺物出土状況(南より)



2. A区3号墳A主体部
大刀出土状況(南より)



3. A区3号墳A主体部
側壁遺存状況(北より)

図版
8



1. A区3号墳B主体部
検出状況(南より)



2. A区3号墳A主体部と
B主体部(南より)



3. A区3号墳周溝内遺物
出土状況①(北より)



1. A区3号填周溝内遺物
出土状況②(北より)



2. A区SK1完掘状況
(東より)

図版
10



1. A区SK1土層状況
(東より)



2. A区SK2掘り下げ
状況(東より)



3. A区SX1遺物出土
状況(北より)



1. B区4号填床面棲出状況（東より）

図版
12



1. B区4号墳奥壁遺存
状況(西より)



2. B区4号墳玄門部遺存
状況(東より)



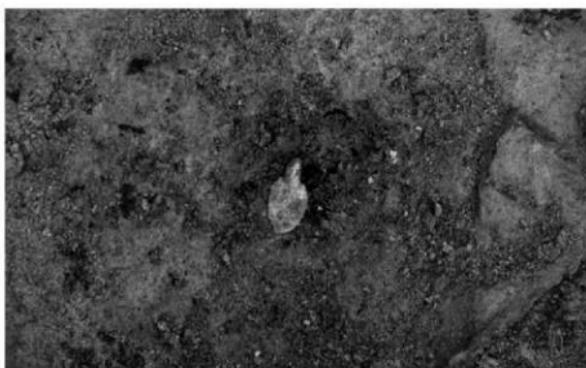
3. B区4号墳袖部遺物
出土状況(南より)



1. B区4号埴輪出土
状況(東より)

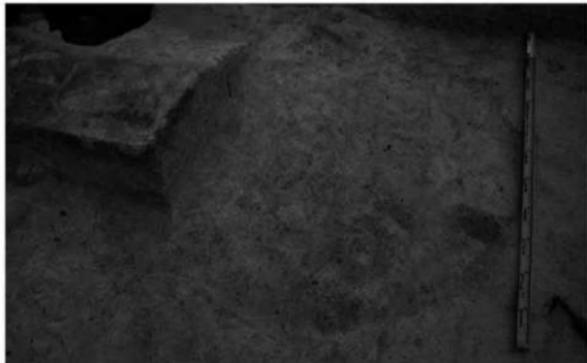


2. B区壺棺1出土状況
(西より)



3. B区壺棺1内銅鏡出土
状況(北より)

図版
14



1. B区壺棺2土坑検出
状況（北より）



2. B区壺棺2出土状況
(西より)



3. B区壺棺2の蓋を
外したところ(北より)



1. B区SK1検出状況
(北より)



2. B区SK1白色粘土
検出状況(南より)



3. B区SK1完掘状況
(北西より)

図版
16



1. 出土遺物 (A区3号墳石室内:1~6・12)



1. 出土遺物 (A区3号填石室内:7~11・13・16・19~25・27・30・32・33)

図版
18



1. 出土遺物 (A区3号填A主体部:35~38、B主体部:39~40、3号填周溝:42~46・48)



1. 出土遺物 (A区 3号埴周溝:47・50、A区SX1:52・53、A区 黒色土:54~56、B区4号埴石室内:57・58)

図版
20



1. 出土遺物 (B区4号墳石室内:59~64・68-69)



66



67



70



71



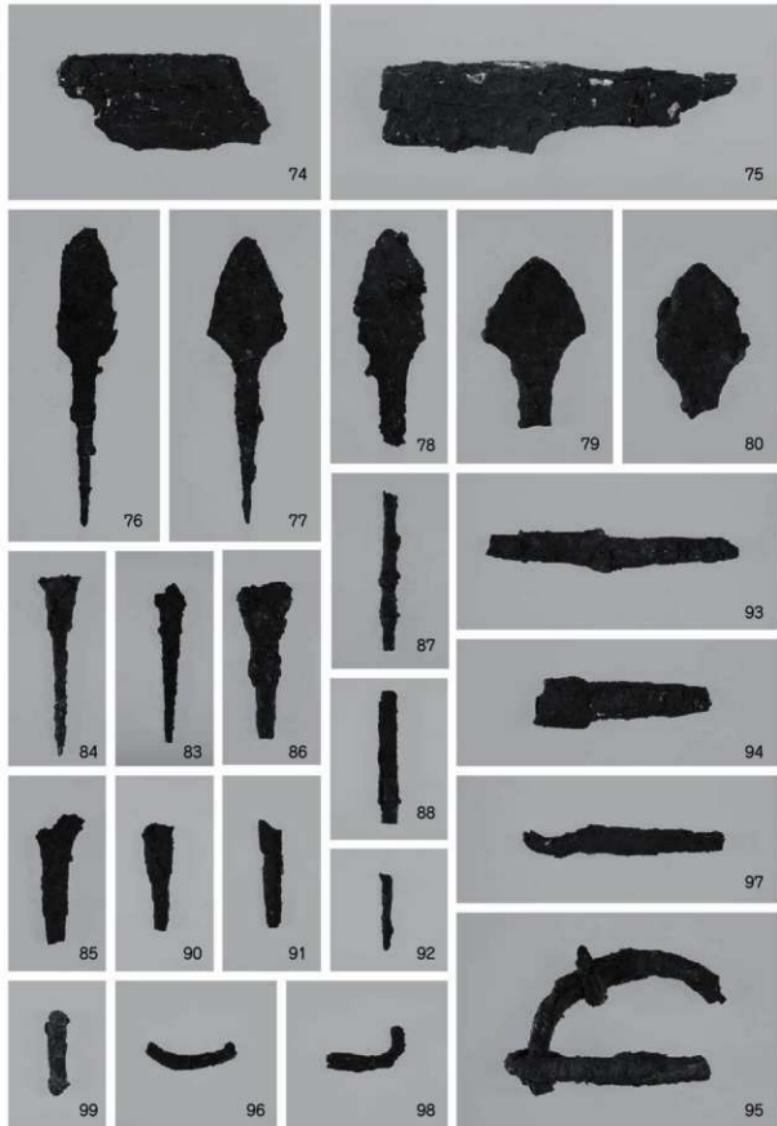
72



73

1. 出土遺物 (B区4号填石室内:66-67・70~73)

図版
22



1. 出土遺物 (B区4号埴石室内: 74~80・83~88・90~99)

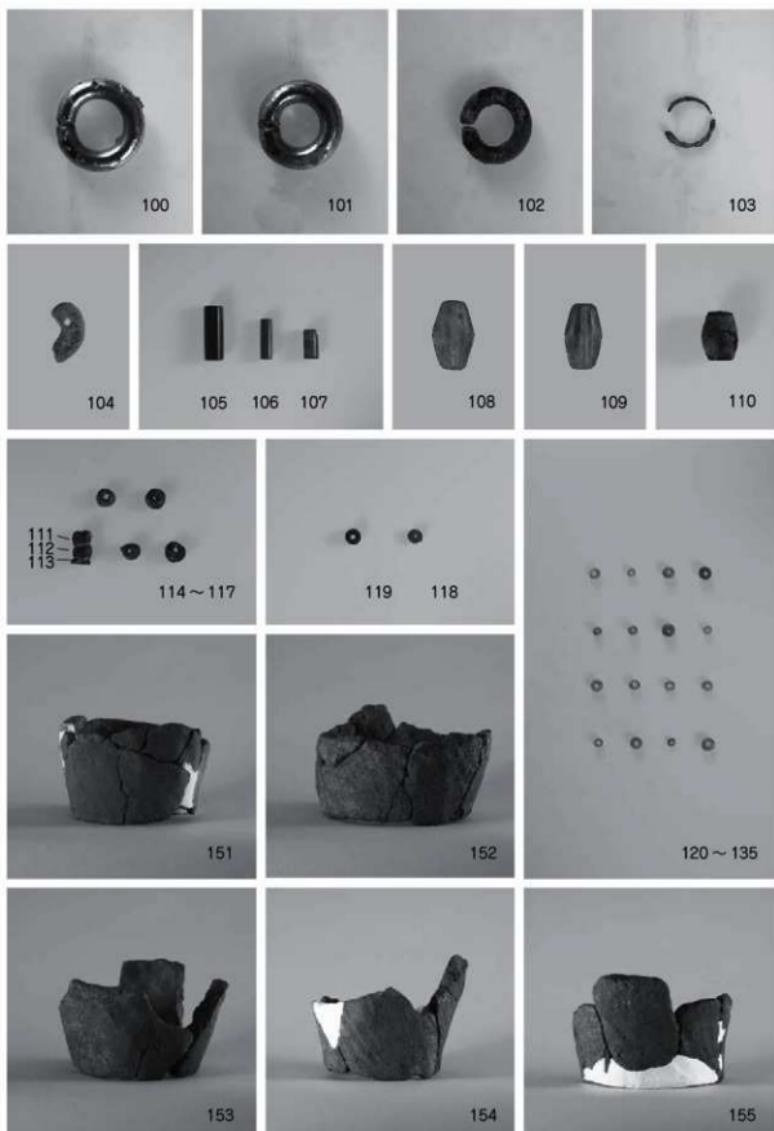


図
版
24



1. 出土遺物 (B区壺棺1:158~160、B区壺棺2:161~162)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふねがたにいせき
書名	船ヶ谷遺跡 5次調査
副書名	市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第192集
編著者名	相原浩二
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2018(平成30)年1月31日

松山市文化財調査報告書 第 192 集

船ヶ谷遺跡

5 次調査

平成 30 年 1 月 31 日 発行

編集・発行 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋 藏 文 化 財 セ ン タ ー
〒 791 - 8032 松山市南斎院町乙 67 番地 6
TEL (089) 923 - 6363

印 刷 岡田印刷株式会社
〒 790 - 0012 松山市湊町 7 丁目 1 - 8
TEL (089) 941 - 9111 ㈹
